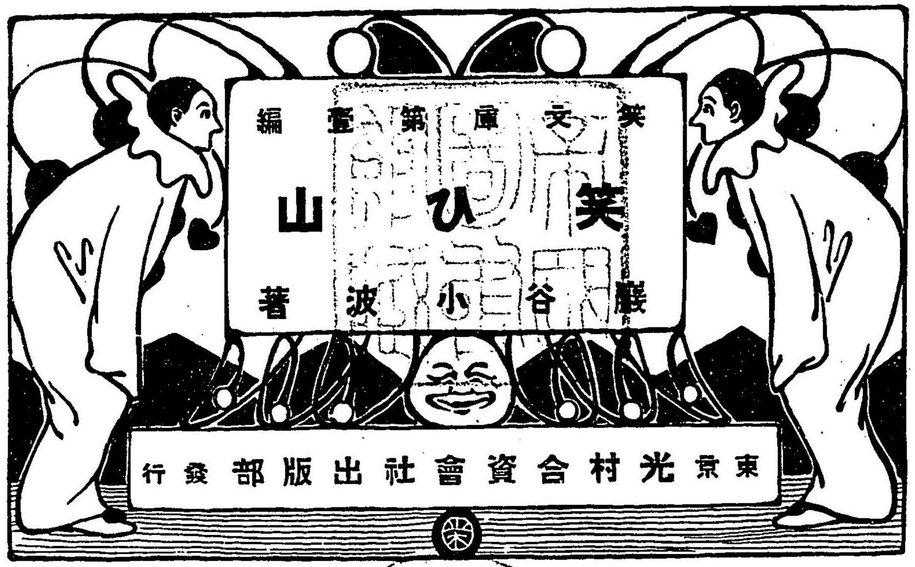
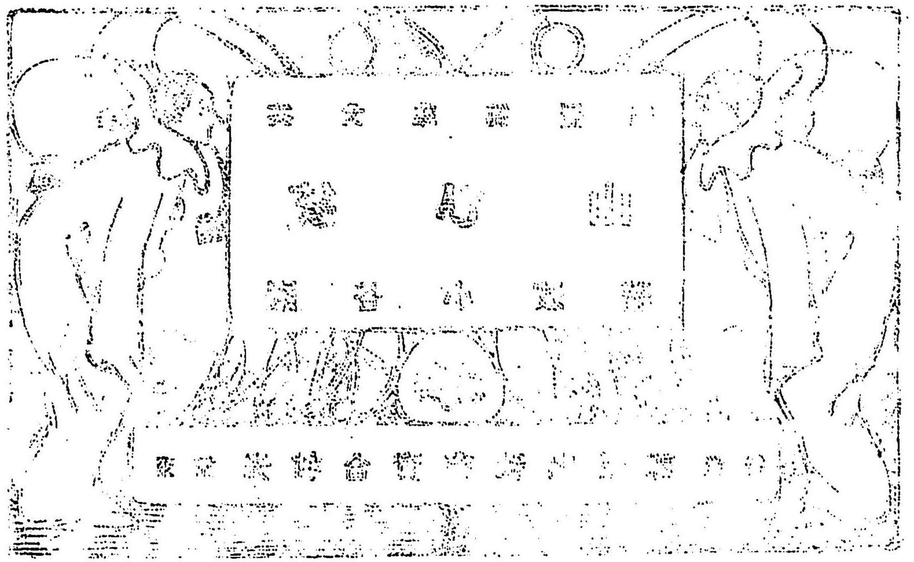
笑い山

特 13
813

特13
813



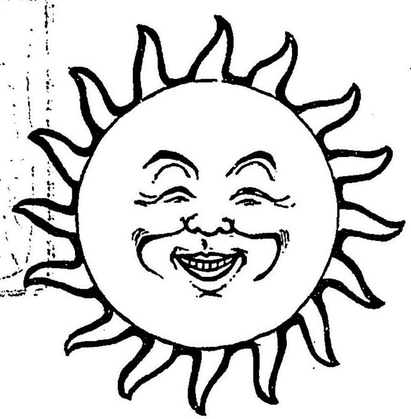
昭和
41 2 19



笑文庫序

世には雨を喜ぶものあり、また曇天の趣味を好しとするものなきに非ず、而も、麗日和風、晴朗の天氣を愛せざるものに至つては、蓋し稀也。

明治の世、文運の盛なる、百花爛漫として庭に滿ち、珠玉燦然として地上堆をなすが如きの感あり、殊に近時に至りては、文藝の發達顯著にして、述作さるゝもの饒多、書を讀むものをして、また多くの遺憾なからしむ。而も退いて案頭を驗すれば、其の多くは人生の悲愁、哀歌、憂悶に主題を取るものにして、



初笑

初日出

今日は一年の幕開、世界では初日出と云うて、大層珍重がつてくれる故、此方でも只では出られまいと、太陽も流石に氣を揉み、今朝は格別に磨き立てたが、生憎鋭の持合が無い。ハテ如何したらよからうと、思案の中にもはや時刻なれば、急いで雲を拂ひのけ、ヌウとも云はず顔を出して見ると、下界は一面

所謂雨を喜び曇天を好しとするの一面のみ、彼の日麗かに風和かに、人生の晴明を語らんとするものに至りては、寥々として未だ多くの供給あるを見ず。樂天愛人、欣々として世に活きんことを願ふものにして、豈に多少の遺憾なきを得んや。

是れ實に我笑文庫出版の企圖せられたる所以也。世間また吾輩と感を同うするの人少からざらん歟。庶幾くは大方の翼賛を藉り得て、以つて徐に吾輩の所期を全うせん。

光村合資會社出版部にて

明治四十一年春　黒田湖山識

に日の丸の旗、「おい〳〵、この澤山の鏡は如何ちや。

初刷の大附錄

新聞屋の配達小僧、初刷の新聞を澤山抱へて、威勢好く立ち出でしが、今日は大附錄のあるゆゑ常よりも荷の重きに、途中にて息を切らせ、全體今日のは何匁あるだらうと、試みに衡量にかけて見たれば、「ふろく二十四貫目あつた。

萬歳

むかしの萬歳は、素袍に侍烏帽子で、なかなか立派なものであつたが、此頃はやう〳〵羽織袴、中には半纏着のじゝむさゝ、あれでは萬歳はさておいて、千歳の價値も無いと云

へば、「道理で謠もぞんざいなものだ。と云ふ後から、「其代り御祝儀のさんざいも入らぬ。

到來の鴨

「おゝ、年玉に貰つた鴨があつた。あれを吸物にしてもらはう。と、主のさし圖に權助心得、例の籠の紐を拂つて、中より引出さうとすれば、鴨大欠伸一つして、「やれ〳〵やつと食はれる事か。

年始の名刺

或男、年始廻りに友人の名刺を賴まれ、それと二枚持ちて、或家の玄關へ來りしに、生憎家のもの控へ居たり。男大きに面喰ひ、あわてゝ一枚置いて去りしが、門を出てから心付き、「南無三、自分のを持て來てしまつた。

初湯

初湯をすまして、あゝよい心持ちやと、客歸りがけに、例のおひねり一つ、番臺へ置いて出やうとすれば、番頭も世辭がよく、「有難う御在ます。何ぞ御忘物は御在いませんか。と云ふに、客一寸考へ、「いや今日は初湯ちやから、まだ落す垢もなかつた。

龜の雜煮

萬御雜煮所と云ふ看板を見て、通りがゝりの獨身者、どうせ自家では食はれぬから、せめて此家で祝つて行かうと、やをら押あがれば、「へい入らしやいまし、御芽出度う存じます。御雜煮は何をさしあげましやう。と云ふ中、客は色板を見て、「はア、鳴雜煮は聽いて居るが、龜の雜煮は珍らしい。何にしろおめ

で度い名だから、一つ持つて來てもらはうか。とあつらへ、さて待てど暮せど來ぬ故、客少し中ッ腹に成り、「おい〳〵、先刻の注文は如何したんだ、かう遲くつちや困るぢや無いか。と怒ると、女中さまで慌かす、「さうお急ぎなら兎の方になさればよろしう御座いましたに。「何んだと。「龜はどうしてもおそう御座いますから。

新兵の敬禮

元日の朝の事、新兵盛裝して通る折から、彼方より營視と見ゆるが、これも盛裝の騎馬にて來かゝるを。さてこそ上長官と、周章てて姿勢を正し、手一杯に敬禮すれば、先方でも其の答禮するに、したり顔にて見返れば、後に巡査の派出所があつた。

歌留多好き

大の歌留多好の娘、去る家のかるたに呼ばれ、心はもうそれへ行きて、晩飯も身に付かず、あまりの心急きに、飯と間違へて香物に茶をかければ、妹傍で笑ひながら、「姉さんいやだ、もう御手付をして。

近縣旅行

「阿父さん、新聞ッて云ふものは嘘を書くもんですねエ。「なアにそんな筈はない。新聞が嘘を書くもんか。「だつてこんな嘘がありますよ。「電報か。「いゝえ。「雑報か。「いゝえ。「論説か。「なに、論説でも無いんです。「それぢやア何にある、「廣告にありますよ。「廣告にあつてたまるものか。「だつて阿父さん自家に居るのに、此處にやア近縣旅行とありますもの。

風の神

風の神、今日は元日だと云ふので、一杯機嫌で居眠をして居ると、遙か下界に當つて、紙鳶を揚げる小供達、「風の神や弱いな、風の神や弱いな。と云ふに、「はッくしよう。はッくしよう。又おれの事を惡く云ふナ。と、起き上つて小言を云はうとすれば、又可愛らしい娘の聲で、「風吹くな、なア吹くな。と、云はれ「はッくしよ、はッくしよ。はッくしよう。えい、とう〳〵。おれを引かせをつた。

鳶の出初

烏には初烏、鶏には初鶏と、みんな縁起を祝うてあるに、おなじ烏の仲間でありながら、おれには何故初がなからうと、鳶の呟いて居るを、隣の枝の鳩慰めて、「いや、さう云はつ

しやるな。お前さんには出初があります。

女房の正月

正月の事なればと、女房こゝをせんどゝめかし立てたるに、亭主そゝかしく、他所より歸り來り、女房を見るより、「よう、これはこれはようこそ御入來、まづ明けまして御芽出度存じます。また當年も相變りませず。と、丁寧に辭儀をするに、女房戯事と思ひ、「何ですねエ、郎君……と、肩を叩けば、亭主首を縮めて、「これ〳〵、女房が見て居ります。

新年宴會

新年宴會の事として、主人公殊の外たべ醉ひ、車の上で船を漕ぎながら、只ある町を通りかかるに、忽ち帽子を落したり。折柄通りかゝ

りの男、直ちに拾ひて車夫に渡せば、車夫篤く禮を云ひて、「旦那樣、これが落ちて居りました。「さうか、早く交番へ屆けろ！

社頭の松

長松が蓋方詣のお供かな
老松や社務所を借る論初
辨松の法破初卯に急ぎけり
松蘆し小猿の鄕ふや鳥居前
門松や此所の宮司は新華

恵比壽切

一　風通

（番頭）今來た若い男と女は、お揃ひの衣服をこしらへるんだといつて、紋御召や華紋織や、京糸織を買はずに、その癖それに似たのを持つて行つたが、一體ありやア何者だらう。

（若者）大方風通（夫婦）づれでしやう。

二　振袖

（紺屋の職人）やれ〳〵、今日も空の樣子が怪しいが、これぢア此間の御注文も、肝腎の御與入に間に合ひませんせ。

（紺屋の主人）なアに大丈夫、この天氣は振袖（降りさうで）ふらない。

三　羽二重

（甲）此間或る代議士が、紋付で議院へ出かける途中、壯士に肩先を切りつけられたが、地が餘程よかつたと見えて、刄物が少しも立たなかつたとさ。

（乙）そりやあ羽二重（あぶない）事だつた。

四　羽織

（甲）やれ〳〵、折角の一張羅が、こんな皺だらけに成てしまつた。

（乙）そんな處へ羽織（投ふり）出しとくからさ。

五　帶

（番頭）今の御客が博多を買つてつたが、うつかり御剩錢をあげなかつた。如何しやう。

（小僧）ぢやア私しが行つて屆けて來ましやう。まだ帶付（追付）けない事はありません。

六　繻珍

（手代）おい〳〵、今來た女中體の女は、高い帶を一本買つてつたが、ほんとに自分でめるのか知ら。

（同）なに、あれやア繻珍（主人）の使だらうよ。

七　小紋

（細君）あの悉皆屋は仕樣が無いねエ。

（下女）奥樣如何か致しましたか。

（細君）わたしが小紋（好ん）でやつたのと、まるで色がちがつてゐるんだもの。

八　上布

（客）番頭、この薩摩は弱さうだなア。

（番）なアに、請合大上布（丈夫）で御座ます。

九　透綾

（店番）南無三寶、また夏物を一反やられた。

（來合せた客）この頃は萬引が流行るから、油斷も透綾（隙や）も成りやアしない。

十　緞子

（見物）もし〳〵、この織物は裝束に成るんでしやうか、それとも帶か蒲團にでも。

（機屋）緞子（如何す）るんだか存じません。

十一　小倉

（見物の甲）あの陳列館の番人は、袴なんぞ穿いて威張つてるぢや無いか。

（同じく乙）それでも餘程閑だと見えて、あれ見なさい、小倉々々（コクリ〳〵）居眠りしてるせ。

十二　久留米

（仲買）この飛白は滅法高いが、まさか一反の價ぢやありますまいね。

（問屋）それはみんな久留米（くるめ）ての價ですよ。

十三　斜子

（甲）彼處の機屋は度々失敗したつけが、とうとう今度はお釜を起したなア。

（乙）あゝ云ふのが斜子ろび（七轉）八起と云ふんです。

十四　友禪

（甲）彼の先生に下畫を頼んでも、中々急に出

來ないで困る。

（乙）さうだらう。何時行つても友禪（悠然）と構へてるもの。

十五　鹽瀬

（女房）もしあなた、服紗地は何れに致しませう。

（亭主）成り丈地の好いのに鹽瀬（しやうせ）。

十六　秩父

（亭主）この銘仙は實に強い、命不知とは此の事だ。

（女房）さうですよ。いくら洗つたか知れませんが、ちつとも秩父（縮む）事はありませんもの。

十七　八丈

（警官）こら、確かにこの反物は、其方が盜ん

だに相違あるまい。

（遊人）へい〳〵恐れ入りました。それでは八丈（白狀）致します。

十八　黒紹

（母親）お前あの羽織は一番いゝのだから、大切にしてお着なさいよ。

（作）はい〳〵。

（母）汚したり破つたりしちやいけませんよ。

（作）はい〳〵。

（母）それから餘所へ行つて坐はる時も、皺に成らない樣にネ。

（作）はい〳〵。

（母）また車に乘るんなら、ちやんと後をはねてお乘りよ。

（作）やれ〳〵、そんな六かしい羽織なら、私やアもう着ますまいよ。

（母）何だつてまたそんな事御云ひだ。

（作）だつてこんな物着てると、却て黒紹苦勞）が絶えませんもの。

十九　仙臺平

（主）成る程この御袴は、大分古風な柄で御在ますなア。

（客）實は仙臺平（先代）からの讓りで御在ます。

二十　無雙

（細君）良人この羽織は、裏も表も一つ物で御座ますねエ。

（旦那）無雙（うむ然う）だ。

二十一　更紗

（客）それではこの御風呂敷を、暫時拜借致して參ります。

（主）更紗（さアさ）御使ひ遊ばせ。

二十二　繭紬

（紬）はアてな……この飛白は大層奇麗で、而もなか〳〵丈夫さうだが、全體如何して拵へたものだらう。

（鼠）まアよく繭紬（研究）して御覽なさい。

二十三　京御召

（細君）清や、あの昨日仕立てゝ來たのを持つて來ておくれ。

（きよ）へい。京御召（今日おめし）遊ばすので御座ますか。

二十四　奉書

（姫）だつて阿母さん、おんなし紋付をこさへるんなら、そんな薄つぺらので無しに、羽二重か斜子にして下ださいな。

（母）そんな贅澤云ふもんぢや無いよ。どうせ

奉書奉公してる身分ぢや無いか。

二十五　結城

（孝吉）オヤ、折角出來上つた羽織の袖が、こんなに短いのは如何したんだ。かう腕が出ちやア、まるで借着見たいで見共無いぢや無いか。

（女房）まア如何しましやう。妾とした事が、すつかり結城（ゆき）を間違へちやつたんですよ。

二十六　琉球

（松）おい見や。あの竹公の今度の衣服は、すばらしい贅澤なもんだが、よく工面が出來たもんだなア。

（梅）ナニ、あれやア食ふ物も食はねエで、琉球（キツ〳〵）云つてやつと拵へたのよ。

二十七　絲織

（姫）ちよいとまア御覽なさいよ。あんなに大勢居る中で、好い衣服着てるのは、あのきイちやんたつた絲織（一人）よ。

二十八　節絲

（甲）よウ君、すばらしい羽織が出來たな。

（乙）なアにこんな物、何も節絲（不思議と）するにやア及ばんさ。

二十九　綸子

（呉服屋手代）先達御用を伺ひました、あの御揃ひの御被布は、御幾枚で御座ましたな。

（客）丁度八人居るのだから、その綸子（八數）だけ頼むのだよ。

三十　領巾

（女）あゝもう止しましやう。この暖いのにこんな物を被つてたら、何だか頭が頭巾々々して來たワ。

大禮服却て胡座御免なり
拜領の牡丹餅を頂ふ三ヶ日
禮服の着終ひ棺で舁かれて居
掛冠と云ふは禮服拂ふ事
白襟がズラリ、殿下の御臨場
主人相不知三更に窓を抜け
婿に成る筈のがいつも早く起き
奉公が辛らくないのに曰くあり
前に居た邸の針を棒に言ひ
桂庵に顔が賣れ尻が落付かず

狂言

師走

（光）斷間も無い光陰でムる。さても世間の衆が、身共の足の早いのを憎んで、彼奴は矢の樣ぢや、一度去ては二度と來ぬ、いまいましい奴ぢや抔と申して、殊の外惡う申しまする。さりながら、是も身共の持ち前ぢやによつて、今更一所に止ることも出來ねば、又ゆる〳〵と歩む事もなりませぬ。吾乍忙しない者でムる。まづ急いで行かずばなるまい。何がさて世間の衆と申す者は、自分勝手な者でムる。月日の速う立つが苦しさに、自己の足の遲いのは言はいで、身共の科の樣に思ふは苦々しい事でムる。イヤ何かと云う中にはや師走ぢや。總じて師走には鬼の出ると云うて、殊の外人間の恐がる者ぢやと聞いた。はやそろ〳〵見えそうなものぢや。

（人）此は此邊に住む人間でムる。一年もはや殘り少なになつて、師走もやがて際になりまするとまた例の鬼が來て、掛取らう掛取らうと喝しまする。此樣な迷惑な事はムらぬ。ヤア、あれに見ゆるは光陰さうな。斯樣な苦しみを致すも、彼奴の足が速いからぢや。呼び止めて暫らく歩行を止めて貰はう。イヤのう〳〵。

（光）呼ばせられましたは身共の事でムるか。

（人）いかにも其方の事ぢや。

（光）シテ何か御用でムるか。

（人）ちと止まつて貰ひ度い。

（光）止まる事は叶ひませぬ。

（人）其處を扨げて止まつて呉れい。

（光）はや師走に成てムれば、身共も忙しうムる。

（人）其樣な意地の惡い事を云はいで、鳥渡止まつてくれいと云うに。

（光）イヽヤ止まりますまい。

（人）止まつてくれい、〳〵。

（光）止まるまい、〳〵。

（人）おのれ此程云ふても止まらぬか、アノ此處な意地惡者め、やるまいぞ〳〵。

京名所枕詞

山の部

○鼻息の　嵐山

嵐は荒しにかけたるなり

○見せ菓子の　東山

東は干菓子に通ず、見せ菓子に使ふ也

○びつくりの　比叡の山

比叡はヒエーにて、びつくりしたる時の間投詞と知るべし

○質物の　鞍馬山

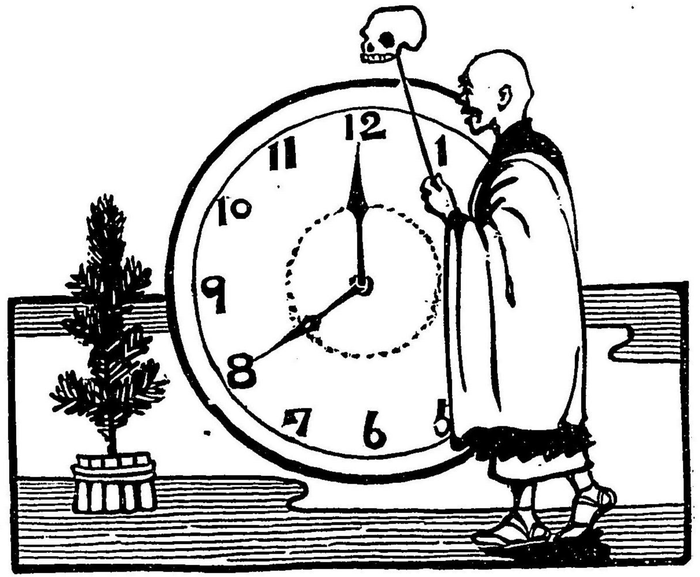
鞍を藏に通はせたるが働きなり

○濡れた手の　粟田山

濡れ手で粟の跡より來る

○弦音の　稲荷山

稲荷は射鳴りの酒落なるべし



狂言　正月

（光）斷え間も無い光陰。來る程にはや正月ぢ

や。さても師走の忙はしさに引替て、今日は空も長閑に、氣ものんびりと致いて、誠に心地よい事でムる。君が代は千代に八千代にさゞれ石の、巖となりて苔のむすまで。ハヽヽ芽出度い〳〵。イヤ斯樣に芽出度い時でムれば、例の樣に急ぎ足で行くも如何ぢや。まづはそろり〳〵と參つて、似合はしい者も通らば、言葉を掛けて同道しやうと存ずる。

(一) 正月は、冥土の旅の一里塚、〳〵、めで度くもありめで度くもなし。御存じの一休。世間の凡夫どもが、相變らず此正月を、芽出度がるが苦々しさに、今日ッた例の洒落頭を持て、町中を廻らうと存ずる。まづ急いで參らう。

(光) イヤあれに法師が見ゆる、まづ言葉を掛けう。イヤのう〳〵。

(一) 呼ばせられたか。

(光) 御僧はどれからどれへ行かせらるゝ。

(一) 愚僧は禿先を前にして、題を後にして、行く處へ行くものぢや。

(光) ハテ知れた事を。

(一) 知れた事なら何故問はします。

(光) さて氣の毒な。此芽出度い正月に、御僧はきつう機嫌が惡いな。

(一) 何ぢや芽出度い正月。

(光) なか〳〵。

(一) 此處なうつけ者めが。

(光) これは如何な事。何がうつけぢや。御僧こそ此芽出度い正月に、忌はしい洒落頭なぞを持て歩行くは、物に狂はせらるゝさうな。

(一) 何ぢや物に狂ふ。

(光) なか〳〵。

(一) 重ね〳〵うつけた奴ぢや。さらば其方の迷夢の醒むるやうに、愚僧が云うて聞かさ

う。まづッ、と寄らしめ。

(光) 心得た。

(一) 總じて人間生あれば必ず死あり。朝に紅顏を誇ると雖も、夕に白骨と成て萬事休す。其脆きこと、譬へば朝露夕電に似たり。

(光) さてなア。

(一) されば富貴は浮べる雲、美貌は棚引く霞の如し、四元空に歸す時は、魂魄忽ち此土を去つて、殘るには此淺ましい姿のみぢや。されども凡夫は此理を知らず、冥土の旅の一里塚を、芽出度い〳〵と祝ふ愚かさ。愚僧は齒痒うてならぬによつて、乃ち此洒落頭を杖の先につけて、此町中を歩行いて廻るのぢや。

(光) すれば正月は芽出度くないと云はせらるるか。

(一) 其通りぢや。

(光) さりながら、それも皆某が一存にムる。

(一) 其方の一存とは。

(光) 御僧はまだ某を知らせられぬが、某は隙行駒と申す光陰でムる。

(一) なに其方が。

(光) なか〳〵。

(一) さればこそ其方の一存にあらう。

(光) いかにも某が一存ぢや。

(一) 其儀ならば……ちと賴み度い事がムる。

(光) 賴み度いとは。

(一) 愚僧も斯樣な姿こそ致し居れ。矢張り年は取り度く無いに依て、ちと其方の足を止めて下されい。

(光) これは如何な事。其方は何の爲の出家でムる。

(一) 其樣な理窟は云はいで、何卒賴みを聞いて下されい。

(光) 師走には鬼が出るに依て、某に止まつてくれいと云ふ人も澤山ある。それは強ち無

理ではないが、其方は出家でありながら、其様な事を頼むと云ふ事があるものか。

（一）其處を抜げて止まつてくれいやいイ。

（光）止まる事はなりませぬ。

（一）止まつてくれいやイ〳〵。やるまいぞ、やるまいぞ。

壬生狂言

頻鳴雁々又田々。此個狂言念佛然。
畢竟地藏御方便。四厘見料似賽錢。

又

元是此邊御百姓。忽被假面成大名。
只爲平常用肥料。舞臺今日總無聲。

狂言

迎松

（大）大果報の者で御座る。此度の御祝儀に依て、大島臺を献上致さうと存ずる。それにつき、鶴亀はゝや揃うて御座るが、まだ似合はしい松が御座らぬ。かゝる目出度き折柄で御座れば、迎もの事に是より高砂へ罷り下だり、彼處の松を曳いて參らうと存ずる。まづのゝ者を呼び出だし、供を申付け

う。やア〳〵太郎冠者あるかやア。

（冠）はア。

（大）居たか。

（冠）お前に。

（大）汝呼び出だす別の事でもない。汝も知る通り、此の度の御祝儀に付いて、大島臺が出來上つたが、まだ似合はしい松が無い。またあれほどの大島臺なれば、まさかに荒神松でも濟まされまい。それに付き、身共は是より高砂へ行て、くわつと大きな松を曳いて來うと思ふが、何とあらうぞ。

（冠）御意無くば申上げうと存じましたる所に、それは一段とよう御座りましやう。

（大）すればもう行く程に、汝も供をせい。

（冠）畏つて御座る。

（大）さア〳〵來い〳〵。

（冠）參りまする〳〵。

（大）さて太郎冠者、此度の御祝儀ほど、世に

も目出度い事はあるまい。さればこそわが國は申すに及ばず。唐天竺、さては西洋の國々からも、献上の品が夥しう參つた。

（冠）いかにも夥しい献上品で御座る。さりながら、頼ふだ御方の思ひ付かせられた、あの大島臺の樣な物は、又と類は御座りますまい。

（大）その通りぢや。あの上に高砂の大松を据ゑたならば、定めて見事な物に成らう。

（冠）それこそ世界一で御座りましやう。

（大）いや、來る程に是は三保の松原ぢや。何と好い景色では無いか。

（冠）何さま聞及うだよりは、又一段の景色で御座る。

（大）あれに見ゆるは富士の山、足高山もよう見ゆるぞ。

（冠）あの天人の天降りまして、羽衣を忘れたとやら申しまするは、此邊の事で御座りま

するか。

(大) 又業平と云ふ歌人、西行と云ふ法師なども、此の景色に見惚れては、何れも一首あつたと云ふ事ぢや。

(冠) それ程の名所で御座らば、高砂まで参られうより、此處の松を曳かせられては何とで御座る。

(大) いゝや此處にも松はあれど、兎角島臺には高砂の事ぢや。早う行て松を曳かう。……あゝら不思議や、俄かに異香馥郁として、何とやら氣色が變つた。

(松)謠 枝を鳴らさぬ時津風、御代の榮を茂らん。

詞 是は播州高砂の浦に、年を經し松の精で御座る。此中風の便りに承はれば、都には御祝儀があると申す。吾等も君が代の雨露の惠に、かゝ生伸びし身で御座れば、かかる時こそ御恩の返せ。是より都へ罷り上り、御祝儀申陳べうと存ずる。

(大) あれに何やら現はれた。太郎冠者まづ言葉を掛けて見い。

(冠) 畏つて御座る。いやなう〳〵。

(松) 呼ばせられたは吾等の事か。

(冠) 如何にも其方の事で御座る。其方はつひに見馴れぬ相好ぢやが、何れの者で、何れから何れへ行かしまする。

(松) 是は高砂の松の精で御座るが、此度の御祝儀申さうとて、都へ上る所で御座る。

(冠) ナニ高砂の松の精ぢや。

(松) なか〳〵。

(冠) さてはよい處で出會ふた。まづそれに待たしめ。いや申し頼ふだ御方、今のをお聞きなされましたか。

(松) 聞いた〳〵。高砂の松とあらば、身共行て挨拶をせう。汝はそれに扣へい。

(冠) 畏つて御座る。

（大）さて松の精殿、遠路ようこそ上らせられて御座る。

（松）なにと、御挨拶で御座るか。して、お前は何れの者でおりやる。

（大）身共は都方の大名で御座るが、其方を迎へに參つて御座る。

（松）ナニ某を迎へにやア……。

（大）あり様は此度の御祝儀に就いて、大島臺を拵へて御座るが、兎角似合はしい大松が御座らぬに依つて、只今其方を迎へに參つて御座る。何卒直に來て下だされい。

（松）さては大島臺が出來たによつて、吾等に來てくれいと云ふ事で御座るか。

（大）なか〳〵。

（松）常ならば直ぐにも參り度う御座るが、此度の御祝儀には、彼方でも高砂、此方でも高砂と、高砂の大流行で御座れば、大島臺許りには居られませぬ。兎角はまたの事に

して下だされい。

（大）いや、次回の事に成らうほどならば、わざ〳〵迎ひには參るまい。是非に吾家へ來て下だされい。

（松）いや〳〵、此度は得い行くまい。達つて松が欲しう御座らば、唐崎の一つ松なりとも迎へさしめ。吾等は御斷り申す。

（大）その樣な意地の惡い事を云はずに、是非共來てお呉りやるまいか。……よし〳〵達つて來ぬとならば、曳いてなりと行かうまで。

（松）ナニ曳いて行く。アッハ、、、、、餘の小松ならば曳きもせめ。この高砂の老松が、何と其方達に曳かるゝものぞ。アッハ、、、ハ、アッハ、、、、。

（大）曳くやうにして曳いて行くに、何の曳かれぬ事があらうぞ。

（松）まことに曳けたら行きもせう。

（大）曳けたら來るか。

(松) なか〳〵。
(大) それは眞實か。
(松) おんでも無い事。
(大) さらば曳いて見せう。やい〳〵太郎冠者、綱を持てイ、〳〵。
(冠) はア、お綱參りました。
(大) その綱をあの松に結ひつけて、汝是から曳いて行け。
(冠) これは如何な事。子日の小松ならば知らぬ事、あの樣な大松が、何と私一人で曳かるゝものでは御座らぬ。
(大) エイ汝までがぬかしをるか。早く結ひつけて曳けいと云ふに。
(冠) はア……冠者綱を松の結に結ひつけ、力をこめて曳く、但し動かぬ心
(冠) なう〳〵頼ふだお方、如何やうに曳きましても、ゆつさりともする事では御座らぬ。
(大) 何と動かぬか。
(冠) 何卒手傳うて下だされい。

(大) 心得た。さア曳くぞよ。えいや〳〵。
(冠) えいや〳〵。
(大) それ動かうワ。
(冠) まだゆつさりとも致しませぬ。
(大) さて〳〵情の強い松ぢや。何としたものであらうぞ。
(冠) 何としたもので御座りましやう。
(大) いや、思ひ出いた事がある。昔天照太神、荒神の腕白を厭はせられて、岩戸の中に籠りたまふに、下界俄かに常闇と成つて、神達物の黑白を分かず、上下殊の外迷惑を致いた。其時猿田、鈿女と申して、頓才の神達おはしまし、岩戸の前に神樂を奏し、さも面白く囃したれば、太神もふと浮き給うて、遂に岩戸を出で給ひぬと聞く。それと是とはちと違ふが、なんぼう情の強い松なりとも、小拍子に掛け、囃し物に乘せ、浮きに浮いて曳かうならば、遂には我と動き

出やうも知れぬ。

(冠) それは一段の事を思ひ付かれました。それならば早う囃やいて下だされい。私は又曳きまする。

(大) すれば汝も、山車などを曳く心に成つて、隨分面白さうに曳け。

(冠) 其段はぬかる事では御座りませぬ。

(大) 名も高砂の相生の、まつと云ふに來もせいで、その枝ぶりのすねたりやア。すねたりや袖を曳いて見よ。

(冠) えいさ〳〵えいさらさア、えいさ〳〵、えいさらさア。

(大) すねても袖を曳かれては、此方向かいで居られうか。

(冠) えいさ〳〵、えいさらさア。えいさ〳〵えいさらさア。

(松) さのみな曳きそ曳かれては　若しこの袖の切れうかと。

(大) それよ〳〵。太郎冠者もつと曳け。

(冠) えいさ〳〵、えいさらさア。

(松) 袖の切れるは厭はねど、若しや赤繩の切れうかと。

(大) それよ〳〵、太郎冠者もそつと曳け。

(冠) えいさ〳〵、えいさらさア。

(松) 一緣も切れねばその網に、つい曳かれてぞ寄り添へる。

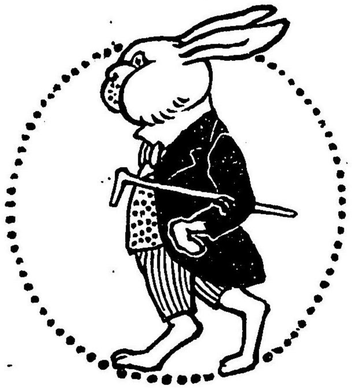
(大) それよ〳〵、太郎冠者もつと曳け。

(冠) えいさ〳〵、えいさらさア。

(松) げに睦ましや相生の、松は契りも深みどり、松こそは契り深けれ。引かれながら入る

蟹甲將軍

熱罵冷評逞毒舌。更無進歩自由別。
張根東京米穀株。伸峽北海炭坑鐵。
蟹甲將軍御宿何。只見滿面穴又穴。



耳競

狂言

シテ　罷り出でたる者は、此邊りの者で御座る。某生まれ付いてよう物を聞き付くるによつて、誰云ふとなく、あれは耳長じや耳長じやと申しまする。何さま某の樣な、耳長の者はあるまい。幸ひ今日つた、正月元日で御座れば、ちと世間をあるき、さま〳〵の事を聞き付けうと存ずる。まづ急いで參らう。イヤまことに、世の中には舌の長い手が長いなどゝ申して、人に嫌はるゝ者も御座るが、耳の長い者は、何事もよう聞えて、これほど重寶な事は御座

らぬ。まづ明日の事は今日に聞え、來年の事は今年に聞ゆる、なんとよい耳では御座らぬか。イヤ來るほどにこれは都大路じや。まづ此邊りに休らうで、ちと世間の事を聞うと存ずる。

アト　これは月の都より出でたる、兎の精で御座る。承はれば當年は、卯の年に當ると申して、下界では某を、殊の外珍重致すさうで御座る。それにつき、身共も是より下界へまゐり、好い仕事に有り付かうと存ずる。まづ急がずばなるまい。イヤまことに、世の中に兎も澤山御座るが、山兎野兎などゝちがうて、身共は月の都の兎で御座れば、これほど貴とい者はあるまい。まづ望の夜には餅を搗き、後の月には芋を掘る。その他雲を驅けり、波を走せ、神通自在を得て御座れば、下界の人の珍重致すも、まことに無理ならぬ事で御座る。何かと云ふ中にはや下界さうな。ヤア、

これはいかう人が行き合ふ。まづ此邊りに立つて見物せうと存ずる。

シテ　これは如何な事。あれに異形な奴がうせおつた。見れば頭の上に、スイ〳〵と立つたものがある。あれは何者じや、まづ聞いてやらう。イヤなう〳〵。

アト　呼ばせられたは身共の事で御座るか。

シテ　いかにも其方の事ぢや。まづ近うよらしめ。

アト　心得た。

シテ　さて其方は何者ぢや。

アト　私は月の都より參つた、神通自在の兎で御座る。

シテ　なんじや、兎じや。

アト　なか〳〵！

シテ　さればその頭に、スイ〳〵と立つたは何じや。

アト　これは耳で御座る。

シテ　何じや耳じや。

アト　なか〳〵。

シテ　さて〳〵長い耳じやなア。

アト　凡そ數ある獸の耳に、これより長いは御座りませぬ。

シテ　ム、。今までは某の耳ほど、世に長い耳は無いと思うて居たが、其方の耳はまた格別じや。

アト　アッハ、、、。其の耳が長いとお云やるが、身共の目には「きくらげ」ほどにも見えませぬ。

シテ　おのれ憎い事をぬかし居る。さりながら、やい兎、某の耳はよう聞ゆるぞよ。

アト　私の耳もよう聞えまする。

シテ　それならば耳競べしやう。

アト　それは一段の事でござる。

シテ　まづ其方から初めい。

アト　イヤそれから初めさせられい。

シテ　それならば聞くぞよ。ソレ〳〵某の耳には、明日の事がよう聞ゆる。

アト　ナニ明日の事が。アッハ、、、。

シテ　コリヤ何として笑ふ。其方には聞えまいが。

アト　イヤ明日の事はさておいて、私には千里先の事が聞えます。

シテ　千里先の事が聞えるとはやア。

アト　月の都に居りましても、下界の事がよう聞えます。それが何よりの證據で御座る。

シテ　さて〳〵恐ろしい耳ぢや。さらば今一度聞かう。ソレ〳〵、某の耳には、軒の垂氷の解くる音が聞ゆる。

アト　私の耳には、庭の若草の萠ゆる音が聞えまする。

シテ　さて〳〵よい耳じや。さらば今一度聞かう。ソレ〳〵、其方は大分空腹いと見えて、腹の虫の鳴く聲が聞ゆるぞ。

アト　あなたは餘程むさいと見えて、背を甸ふ虱の足音が聞えまする。

シテ　南無三寶。それまで聞ゆるか、さて〳〵よい耳のウ。それほどよい耳ならば、何と某に讓つておくりやるまいか。

アト　イヤそれは成りませぬ。

シテ　成らぬと云ふ事はあるまい。是非に讓つてくれい。

アト　どうあつても成りませぬ。

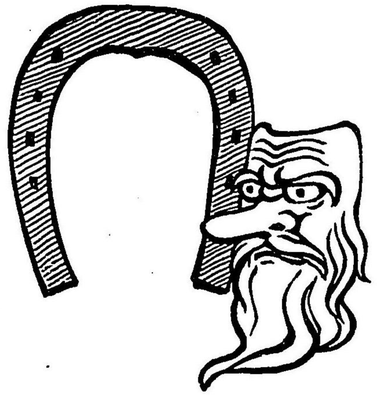
シテ　おのれこれ程頼うでも聞かずば、力づくでも取つてやらう。

アト　それは沒義道で御座る。

シテ　沒義道でも取らずばおかぬ。

アト　なう恐ろしや〳〵。此樣な所に長居はならぬ、はやう月の都へ去なう。

シテ　去なうとて去なさうか。あの此處な耳長兎、その耳を置ぬ中は、やるまいぞ〳〵、やるまいぞ〳〵。



蹄鐵上人

むかし愛蘭に、蹄鐵上人と云つて、名高い坊さんがあつた。元は鍛冶屋であつたが、不圖した事から宗旨に入つて、遂に立派な坊さんに成つたので。それには面白い話がある。

この上人が、まだ鍛冶屋で居た頃は、大の法螺吹、大の天狗で、凡そ世界に鐵で拵へるものなら、どんなむづかしい物でも出來ない事は無いと、始終自慢計りして居た。

すると、ある日の事で、つひに見なれない一

人の男が、馬に乘つて店の前へ來たが、その馬の蹄鐵は惡くなつたから、一寸打ち直し度いと云つて、いきなりその馬の四本の足を、四本とも切り落して、それを持つて仕事場へ來て、自分で蹄鐵をこしらへて、それ〴〵その蹄に打ちつけ、やがてまた元の足にくつゝけながら、

『どうだ。お前にもかう云ふ仕事が出來るか。』

と云ふ。

鍛冶屋は元より負惜みが強いから、

『なんの出來なくッて。』

と、奥から庖丁を出して來て、いきなりその馬の足を、以前の通りちよん切つて、それから蹄鐵を打ち初めたが、四本分一時に打つので、思ひの外手間が掛ると、その間に足を切られた馬は、あまり血を出したものだから、バタリと其場へ倒れて、蹄鐵の出來上つた時分には、肝腎の馬は死んでしまつた。

流石の鍛冶屋も、これには大きに驚いて、顔の色まで青くして、只まご〳〵する計り。

これを見るとその男は、ニッコリ笑ひながら、

『どうだ鍛冶屋！いくらお前が天狗でも、馬の足は繼ぐ事が出來まい。』

と云ふので、鍛冶屋は頭を掻きながら、

『どうもこれ許りは出來ません。實に飛んだ事を致しました。』

と、とう〳〵謝罪てしまつた。

『謝罪るなら勘弁してやるが、その代りこれからは、あんまり自慢をしないがいゝせ。』

と云ひながら、その足首を取つて、元の脛へ押しつけたら、ちやんと元の通りくッついて、馬はヒンと又起き上り、その男を又背に乘せると、そのまゝ何所へか飛んで行つてしまつた。

これを見せられた鍛冶屋は、初めて今までの高慢を悔やみ、一念茲に發起して、鍛冶の

道具を法衣に替へ、それから宗旨に歸依して、遂に名僧に成つたと云ふ話。

京名所枕詞

寺の部

○夜の鶴の　高臺寺
　高臺寺は見を大切に通ず

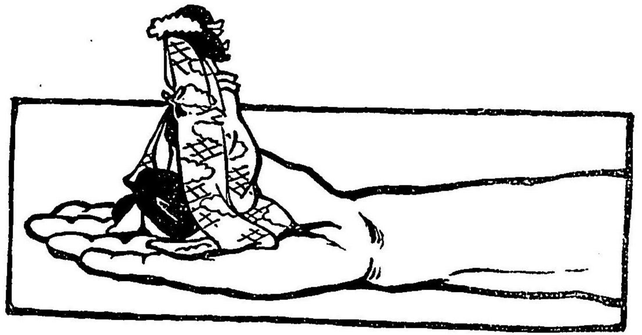
○主と成るや　泉涌寺
　先入主と成るより來れるものなり

○ドンの鳴る　聖護院
　聖護は正午に通ずと知るべし

○保養する　東寺
　東寺とは湯治の意か

○將棋さす　金閣寺
　將棋の金と角と云ふ意なるべし

○拍子木の　知恩院
　知恩をつめて讀めばチョンとなる。



珍竹姫

むかし赫夜姫は、竹の中から生まれ出て、遂に昇天したと云ふ程の、日本一の美人であつたが、此所に珍竹姫と云ふのは、珍竹林の竹の子の、その皮にさへ包まれると云ふ、世

にも奇體な小人姫であつた。

されば初めて產聲揚げた頃は、僅に小指に手足の生へた樣であつたが、それでも次第に生ひ立つて、鬼もと云はれる十八の春には、足を襁立て、手を伸ばせば、机の端にも屆く程に成つた。此上はいくら焦思つても、蓋し丈の伸びじまひであらう。

と思つた母御前は、或日父の殿に向つて、

『珍竹ももはや年頃で御座いますが、婿を取らねばなりますまい。』

と云ふと、父の殿も點頭いて、

『何さま軀が小さいので、何時までも小供の樣に思ふたが、もう十八であつたなア。然しあんな小さい奴に、よく似合ふ婿があらうかのウ？』

『廣い世界の事で御座いますから、まんざら無いとも限りますまい。一つ高札を出して御覽遊ばせ！』

『成る程それは好い工夫ぢや。では早速さう致さう。』

と、是から諸國へ高札を立てさせ、婿に成らうと思ふ程の者は、遠慮に及ばず名乘つて出る樣にと、かう云ふ事を觸れまはした。

すると世間は廣いもの、獨身者はまた多いもので、この高札が出るが早いか、我も我もと名乘つて來る者、早瀨に上る鮎はものがは！忽の中に館の前は、入婿志願の若者で、市でも立ちさうな有樣と成つた。

さてこれからが試驗である。試驗にも順序があるので。まづ最初に身元調、體格檢査から、學術武藝を、一ト通り試驗した揚句が、いよ〳〵姫君御對面の段と成る。

それで大方の婿殿は、第一第二の關は無難に越えても、第三、第四の門へ來ると、つい襤褸を出して追ひ返へされる。

が、さて第四まで無事で通つて、いよ〳〵

對面の一條に成ると、今度は婿殿の方から、世にも小粒な珍竹姫の姿に、アッと云つて逃げてしまふ。

かう云ふ風で折角の緣談も、所謂る長し短し、先方でよければ此方が眞平、此方が進めば彼方が逃げる、と、かう云つた鹽梅で、急に纏まりさうにも無い。

尤も珍竹姫の方にも、實は婿殿に注文があるので。まづ男振りは十人並に優れ、身丈は寧ろ高い方で、その上立派な髭の生へた人をと、心の中に念じて居たから、偶々前試驗に及第した、可成り話せる婿殿の候補者も、『アラいけ好かないヲ』の一聲に、嘗無く跳付けてしまふのであつた。

されば父の殿も母君も、一方ならず心を痛め、此上は高札を便るより、神佛の力を借る他は無いと、近所の觀音樣は云ふに及ばず、遠くの稻荷、不動尊にも、それ〳〵代參をさ

し立てゝ、あはれ好き婿賜はる樣にと、頻りに祈願を籠めたのである。

すると、或る日又一人の候補者が來た。これは恐ろしい大男で、一寸道を歩いてさへ、兩側の家の障紙が、ビリ〳〵響く位であつたが、やがて館の玄關へ來ると、此物音を聞きつけて、父の殿は奥から出て見ると、其所に人が居る樣であるが、首は庇から上へ出て居るので、何云ふ人やら顔見る事が出來ない。仕方が無しに二階へ上つて、やつと差向ひに成つた所で、初めてその男を見ると、何さま立派な男振り。毘も御詛へ通りにあつて、天晴れ見事な婿殿ではあるが、何分小粒の珍竹姫とは、まるで胡蝶に松の大木、あまり釣合が取れ無過ぎるから、其譯を云つて斷らうとすると、大の男は頭を振つて、破鐘の樣な聲をしながら、

『イヤ決して苦しうは御座らぬ。御覽の通り

私は、名を雲突太郎と申して、世にも圖抜けた大男で御座れば、今までに嫁を探しましても、この人間の仲間の中には、所詮釣合ふものが御座らぬ。——また承る所によれば、御當家の珍竹姫にも、世界に稀れな小人とやらで、今まで幾千人と御見合を爲されても、まだ似合の婿殿が御座らぬとか。さすれば其方は小さ過ぎての不緣、此方はまた大き過ぎての不緣、似合はぬ樣でも不緣は一つ、不緣同士が緣を結んだら、却つて良緣に成らうも知れぬと、斯樣存じて參つた次第。何卒此理を御判じあつて、型の通りの御試驗ある樣、偏へに御願申すので御座る。』と、さも思ひ込んでの口條、父の殿も何うやら道理らしく聞いて、

『然らば兎に角試驗を致さう。』

と、是より檢査に及んだが、元より體格は見ても知れるに、一も二も無く滿點を付けて、それから學術と成つた所、これも難題を苦も

無く解いて、反對に試驗官がへこませられさうな勢。

さて武藝の段となると、これもその外觀には、皆見怯して後込すれば、有無に及ばず及第して、いよ〳〵姫御前御對面の段と成つた。所が前にも云ふ通り、姫は稀代の小人の所へ、相手はまた稀有の大男。所詮尋常の對面では、互ひに顏が見られまいと、まづ雲突には床几を與へ、さて珍竹には足場を組んで、その上に褥を敷かせ、これで双方紹介せるのに、元より會ふこそ初回なれ、噂は前から聞いて居て、互ひに小い、大いで、承知の上の對面ゆゑ、双方とも驚かず、まづ慇懃に禮をする。

立合の母御前は、若し雲突に咳拂でもされたら、姫は直ぐに飛ばされてしまはうと、人知れずこんな心配もして居る。

然し當人は却つて心得たもの、常の聲では小い膽が潰れやうと、雲突はわざと口の中で、

『さて珍竹殿！不思議な御緣でこの雲突が、花婿試驗に應ずる爲め、かく罷り出でゝ御座るが、試驗は型の通り濟ませ申した此上は姫の御意次第。若し身共を此儘に、婿にせうと仰せなら、雲突この大の體を、粉に碎いても姫の爲めに、きつと實を盡して見せうが、それとも矢張り御否なか。二つに一つ、イザ御返事が承り度い。』

と、言葉やさしく陳べたのは、餘の者には聞えなかつたが、姫には腸まで應えたと見えて、さも嬉しげに身を震はせ、

『オ、雲突太郎さま。三千世界は廣うても、貴君の他には珍竹の、殿と頼むお方は無い。何卒私を妻として、可愛がつて下だされや！』

と、云ふ間にヒラリと飛んだと見れば、珍竹姫の花の姿は、雲突太郎の掌上に、さながら移し植ゑられてしまつた。

『三國一の婿取濟んだ。シャン〳〵〳〵お目

出度う。』

と、居並ぶ人々が口々に、謠ひ囃すその中に、式の盃運ばれて、夫婦の固めは首尾好く濟んだが、不思議はその一夜の中に、雲突太郎も珍竹も、一人は縮み、一人は伸びて、明くれば共に常の人間。互ひに手に手を取り合つて、さも睦ましく行く所は、正に是比翼の鳥、連理の枝、程無く二人の間に出來たは、夜光の玉の樣な若君。めでたし〳〵。

其當座助教授下宿から勤め
賣物の娘があつて部屋を貸し
下宿普請借家普請の上を行さ
梵妻が理財に長けて「貸間あり」
法界も元居た宿の門は除け

柳の落葉

▲堯舜の世には錠前直し來ず

去る程にさても明治の今日には、家中の鍵を下帶にくゝりつけて、盜人の夢の戸惑ひに、かへつて盜人と誤られ、時ならぬ田樂刺に遭ふたる與方さへあり。あゝ世も末なるかな噫。

▲なる場所でならぬも飛車の一ト器量

桂馬の高飛、なるかならぬに、餌と成つて懲戒免官を受けむより、如かず飛車は飛車として、總務委員に滿足せむには、などゝ負惜みの空威張りも、あたら成りすましした角を箸めて、實は其邪魔に成ると知らずや。

▲腰元は隱居の足を櫓にかまへ

誰か知らむこの腰元、明日は紙上に名を曝されて、**番號附**の浮名を流さんとは。舵の取り方もむづかしきものなり。

▲通さぬは通さう爲めの道普請
一應道理には聞ゆれど、その通さう爲めの普請も、通さぬ間の長きに過ぎては、諸人迷惑一方ならぬ由、毎度端書集に見えたり。

▲作病を入れると四百五病なり
娘の曰く、戀病を入れて四百六病よ。浪人の曰く、貧病を入れて四百七病で御座る。

▲死金が溜ると親父死にこちれ
『獵官が出來ると議員辭しこちれ。』又曰く、『大勳位もらふと總理辭しこちれ。』兎角兩手に鍛頭を持つて、足元があぶなくなるものぞ。

▲去狀に無筆は鎌と椀を書き
そんぢよ其處等のお内儀さん、今度の熊さんは、藤さんよりも不實だとさ。御用心御用心。

▲言葉多きは品少なしと質屋云ひ
その云はれた男、後に謳うて曰く『……今

朝も質屋でほめられた、コリヤ〳〵。』

▲日本の紙は横には裂けぬなり
おッと待つた、此頃は藥紙と云ふ奴があつて、煙管の脂も通されねエ。

▲水害の村へのさ〳〵女衒ゆき
さればこそ五ヶ町にも、美濃者、尾張者、さては青森縣、岩手縣の產物多き、亦宜ならずやと、何處やらの書生さんが云ふた。

▲今は子の四ツ乳で母は養はれ
此母いつも左團扇を使うて、四時御花見に浮かれて居るとか。さりとは三筋の糸の力も、侮りがたきものぞかし。

▲玄關より中は妾の掌上
あまり增長すべからず、般鑑遠からず、近く朝鮮の閔氏にあり。

▲憎い腹から可愛い孫が出來
かくて子と云ふもの、只に夫婦の間のみならず、嫁姑のかすがひともならば。めでた

し〳〵。

▲菰着ても身は富貴なり冬牡丹

その菰を着た牡丹の側には、おかひこぐるみの菊が咲いて居る筈なり。

▲胸の火を一筆しめす硯墨

それを又焚きつける奴もあれば、グニヤリと成る人もあるなり。

▲蔚山にならぬは御代の難有さ

處がお前さん、今日日やア兩に四升ですから、遣り切れたものぢやアがアせん。

▲見ず云はず聞かず三匹四國猿

此四國猿、今は舞臺へ擔ぎ出されて、疳癪を起したり、憂目を見たり、そしていろんな惡口を聞かねばならぬ。長生すれば耻多き世や。

▲金銀も身輕に成つて世を渡り

然るに彼の金貨なるもの、吾等が家には、一向御立寄無し。ちと身輕に歩行かせ度き

ものなり。

▲細見を突つき女房こいつだな

赤い新聞を前に置いて、青い筋を出す細君多きも宜なり。

▲母の供むすめの轉ぶ處迄

わが兒を喰物にする、これを狼婆と云ふ。然るに世にはまた

▲此頃の娘の扁は獸なり

と云ふのがある。諸君御用心〳〵！

▲簾を卷く官女雪より清らかさ

其實は名代の御轉婆なりし由。

▲隱し夫ありとは主人相不知

『知らぬは亭主許り』と呼ばれて、毎度高座の御笑にはなれど、まだ實例の列記されしを聞かず。

▲幾疋も百足のつゞく總登城

今ならば下の五文字を、停車場と改むべき所なり。

▲笑ふので四百餘州の民は泣き

『笑ふので四十餘縣の民は泣き』とも聞えさうなり。

▲中指を折ると明智はしてやられ

一イ二ウ三イと、中指まで折らぬ中に、諭旨免官と來るものあれば、彈劾上奏と來るのもある。秦の始皇ではないが、ちと長生の藥を探がしやれ。

▲蛇の病氣此節蚊さへ通り兼ぬ

猩々さんは、相變らず御機嫌ださうですが、海豹さんは飛んだ事で御座ました。イヤ麒麟も飛んだ事でと、動物園での取沙汰さわがしい事かな。

草餅に齒の亂杭を悔しがり
五ツ目は砂糖をしやぶり餡を甜め
草餅の化石して居る重の隅

畜生氣焰

▲蛙の曰く

おれは子を產む時、卵を好い加減にひり放してておくが、其でも勝手にかへつて、勝手に大きくなつて、初の中こそお玉杓子なれ、後には皆親に似てしまふ。それに人間は如何だ？たつた一人の子供を產むにさへ、ウン〳〵苦んで腹を痛めて、夜の目も寢ずに育てた揚句が、成人して親の云ふ事を聞かず、親の眞似

も出來ぬと云つて、兎角恐痴ばかり云つて居る。何と不仕合な事では無いか。おれは人間に生れて來なかつた事を、天道樣に御禮申す。

▲鷄の曰く

おれは女房を一羽と定めない。三羽でも、五羽でも、十羽でも、二十羽でも、牝さへあれば皆おれの女房だ。それで居て女房共は、少しも恪氣喧嘩をせず、仲好く卵を產み合つて居る。それに人間は如何だ？。勝手に一夫一婦と極めておきながら、又しても餘所の花に手を出して、家庭に波風を立てたり、社會から爪彈されたりする。なんと馬鹿な者では無いか。おれは人間に生れて來なかつた事を、今更神に感謝する。

▲鳥の曰く

おれが物を食ふに、その口の達者な間は、何

所へ行くも困らない。よしんば人が飼つてくれないでも、洗槽下か掃溜へ行けば、何か知ら食ふものがあるから、年中空腹い事を知らない。それに人間は如何だ？物を食ふには錢が要る。錢を取るには働かねばならぬ。年中あくせく汗を垂らして、それでも好な物は思ふ樣に食へまい。なんと不自由な事ではないか。おれは人間に生れて來なかつた事を、いつも造物者に感謝して居る。

▲龜の曰く

おれはいくら酒を飲んでも、面色は云ふ迄もなく、甲良の艶迄變へないで、而も萬年の壽命を持つ。それに人間は如何だ？二三合の振舞酒にすぐもう足を取られて、派出所の厄介に成つたり。高が百年足らずの定命を、酒ゆゑ中途からヨイ〳〵に成て、生きながら木偶の坊で居る奴さへある。なんと意氣地の無い

話では無いか。おれは人間に生れない事を、此上も無い名譽だと思ふ。

▲犬の曰く

おれは三日飼つてくれた人の臭ひは、三年たつても嗅ぎわけて、きつと尾を振つて側へ行く。其に人間は如何だ？困る時には腰を屈めて、臺所口から胡麻摺りに來るが、ちつと尻が溫まつて來ると、門前を通つても寄り付きもせぬ。なんと恩不知な奴では無いか。おれは人間に生れて來なかつた事を、むしろ天下に誇らうと思ふ。

▲馬の曰く

おれは重い荷を負つたり、遠い路を走つたりするのに、隨分骨が折れて成らぬが、それでも默つて小言一つ云はぬ。それに人間は如何だ？ちつとでも仕事が嵩ばると、すぐストライキの暴動のと騒ぎ立てる。なんと我儘な話ではないか。おれは人間に生れて來なかつた事を、少しも後悔する事は無い。

▲猫の曰く

おれは小判を見せられても、平氣で日向で眠つて居る。其に人間は如何だ？小判や、金貨はさておいて、薄ッぺらな紙幣や株券を見ると、もう目色を變へてかぶり付き、義理も世間も忘れてしまふ。ニャんと淺ましいものでは無いか。おれは後の世に人間に成れと云はれても、もう眞平ぢや、眞平ぢや。

後方動務ア、行賞も後廻し
見せ合うて金鵄喜ぶ無事同士
金鵄が來ると金米はツイと除け
年金が年賦と變る間の濕さ
男爵になつて將軍死こじれ

水鳥會の辭

（葉書畫會の巻）

海戰の功は水雷艇に仕てやられ、音信の用は葉書にて事足りなん。中にも繪葉書は、方五寸を出でざるに、春夏秋冬の景物は更なり、森羅萬象の數を盡して、神祇釋教戀無常、思ひの儘に寫し出だせば、近頃の流行前代に聞かず、猫も杓子もこれを弄ぶ程に、彼に三毛ならぬ三色版の巧を見せ、是に盛高く虛刷の妙を示して、斯道數年が間の進歩は、やがて世界に弼たらんか、去る程に茲に水鳥會と聞えしは、元より拗者の寄合とて、漸くその眼の肥えたればや、インキの香の鼻に着けるを厭ひ、新に一機軸を案じて、各々無地の葉書を持ち寄り、甲畫かば、乙贊し、君に圖あらば、我句を題せんと、その日其場の出來榮に、當意即妙の才を鬪はさんとて、更に同好の士を狩り催し、葉書畫會をぞ思ひ立ちける。

さるは萬八、中村の當時にも未だ聞きも及ばざりし好事ならずや。さても其日の清興は、一紙の上に留まらず、永く互ひのアルバムに殘つて、それより一代の交誼を繋げば、水魚とも會に名づくべきを、故らに水鳥會とは、地黃坊が緣者とや見ん。所詮は水莖の水、鳥跡の鳥、水に水彩の意句へば、鳥にはがきの語も忍ばせて、他は何事も水鳥の、よしその足にひまは無くとも、心に閑あり、手に藝ある人々は、例の忙中の清遊に、共に命を洗はんと也。來れや來れ、いざその水の。乾かぬ間に、その鳥の。渡らぬ先に。

掛取にツリを出させる氣味の好さ
羨度胸掛取盃いて財なり
掛取に鹽をまいたでれぢ込まれ
好い面ナ、鬼と云はれにかけ廻り
さア來いと紙幣束取つて出で向ひ

俳諧もう明日

▲十二月七日、例の點燈頃より、秋聲會例の如し。但し書記役には、思ひ設けずも此の小波を指された。されど、曩きに十千萬堂が、思ひ切て九時間と題したに對して、今度は「一時迄」とする心算であつたが、只それのみでは午後か午前か解るまいと思案の折から、誰やらが歸際に時計を見て、オヤもう明日の部だと呟いたを、其儘小耳に挿んで、さてこそ斯うは名付けた。何處やらの伯父さんが見やしやつたら、又例の稚態と笑はつしやらう。

▲胼男胼女の議論は、執念くも前回から持越して、此夜も口角泡を飛ばした男二人。片方紅葉、此方期雲、双方願を突き出して、狛犬然たる意氣組、一座の奇觀ではあつたものゝ、その辰巳上りの聲が、句案の妨害に成てならぬので、酒竹閑蟬等頻りに水を入れ、會主竹

冷軍配を割り込で、遂に次回までお預りとなる。兎角此胼の癒り惡くさよ。

▲此爭論の中、各自名言あり。紅葉は曰ふ、「髯男あつて胼男無きは、茶碗酒あつて茶碗水無きが如し」と、期雲は曰ふ、「胼男は猶痘痕男の如し、用ひて何の差支かあらん」と。(此時知十はお靜にと曰ふ)竹冷は曰ふ、「總て議論と云ふものは、かう云ふ明るい處でしてはいけない、燈火を消して眞闇にして、其處で腕を組んで考へて見ると、自から眞理が發見されるものだ」と。吾は又警句を吐く

胼男大の男を騷がしぬ

と。「大の男を騷がしぬ」ならば、胼女がよからう、イヤ胼娘の方だらうと、果はドッと大笑ひ。

▲此夜座に就いて、誰もあッと云はされたは、會主御自慢の扁額である。烏黑(實は雨谷)の墨梅、泥舟の題句。句は御存じの、「詔はぬ枝先

つよし梅の花」と。聞說く泥舟翁は槍術の達人とか。さては此の梅槍梅と見たは俳目乎。

▲宿題の披露の最中、無權利者なる飯人(此人宿題を出さなかつた故退屈紛れに、傍の柱にかけてあつた頭陀袋をさげて見る。其刹那、披露者は讀んで

煤掃や太郎が下げる歌袋　金升

の句に至る。閑蟬興に入て、實況々々と之を頂けば、それより進んで

煤掃や蕎麥代拾ふ疊裏　竹雨

の句に到る時、忽ち馳走の饂飩現はる。小波頭を叩いて、「頂きます」と云ひながらスルスル〳〵！

▲此夜珍らしき客星が現はれた。そは國文の大家萩の舍の大人である。但し今夜は只傍聽とばかり、始終緘默して居られたが、不知次回よりは如何なる異光や放つらむ。

▲これも新加盟の中に、常は嚴めしい冠を頂

いて、業の鏡の裁判をする人。俳道には名さへ愚佛と呼ばれて、三度撫でられても腹も立てず、地藏も及ばぬ愛嬌に、もう明日と云ふ頃までの秀句、積んで賽河原の小石の如し。

▲期雲は友人から頼まれたと云つて、半紙大の雅帖を持ちまはり、人の苦吟の隙を狙ふ。忽ちにして生捕られる者、萩の舍紅葉等三五輩。さても此人の如才無さよ。

▲洒竹囊に十千萬堂に素破拔かれて、もう自棄の箍を外づし、此夜は次の間の長火鉢を占領して、烏黑が喰ひ荒しの干魚を下物に、茶碗酒と云ふものをせしめる。尤も之に一層の元氣付いて、咳唾珠を成し、曖は駄句を爲す。

▲當座の題に餅搗と云ふがあつた。奇矯の句續々出で、披露を勸める紅葉腹を抱へて倒れると幾度、涙と水鼻を啜りながら、漸うにして讀み了る。中に一對の秀句あり。前なるを

餅搗に鉢卷をする坊主かな

とす。坊主の鉢巻面白しと之を頂く者五六人。句主竹冷グッと得意に成る。既にして又、

鉢巻や果して餅を搗く男

の句が出た。其働きは坊主の比に非ずと、更に此鉢巻を頂く者七八輩に及ぶ。其處で句主を尋ねると、豈計らんや四三嬢ならんとは。於是竹冷遂に阿嬢に如かず。鉢巻を脱いで降参の體。

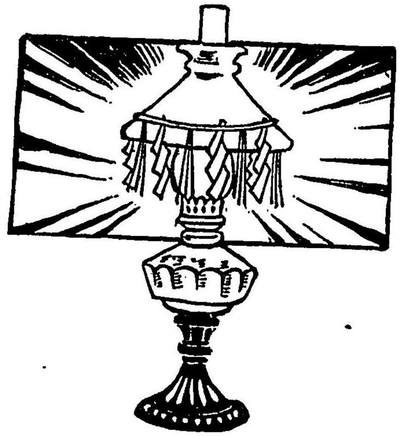
▲次回は忘年の爲め、少しは盛んにしやうぢやないかと、衆議一決して、茲に特別委員三名を撰ぶ事となる。竹冷假りに議長と成て、其の三名を指名す、曰く醉月、曰く松江、曰く小波。醉月は辯護士、松江は純俳人、而して小波は御存じの少年屋。似ても似付かぬ取り合せ、是がほんとの天狗俳諧ぢやと、醉月髯を掻ながら呟けば、此處等が所謂變化の妙、流石は聽雨窓の宗匠樣と、紅葉は餘計なお世辭を云ひ、茲に役不足も云はれぬ事と成て、

おさらばさらばと立ち上る。——于時明治二十九年十二月八日午前一時。

蒲生君平　毎句韻

昔者俵藤太秀郷。一矢射殺平親王。
會津參議堪威張。輔豐太閤功勞長。
末流野州爲油商。天性器量不尋常。
夙慨歷代山陵荒。獻書天朝與公方。
公方爲之甚周章。禁止發行頗手强。
熱心增加忠義腸。不管俗物多呼狂。
宜哉其名後世香。贈正四位子孫慶。
誰言君平凝西洋。此是別姓白面郎。

評　起句擒先祖俵藤太殿。結句引張出今若武者松本氏。何等腕白。



洋燈大明神

三題話　博覽會、洋燈、官吏

夫れ大慾は無慾に似て、小儉は大利を失ふ。茲に藪坂澁と云ふ小官吏ありけり。名の如き大の吝嗇家にて、毎日の辨當も、例いつも麥飯に梅干の外は用ひず。夜は油が損ぢやと云うて、日が暮ると直ぐに床に就しが、此頃役所の執務時間が殖ゑて、歸宅が大方夜に入るにぞ、女房は一昨々年夫の死んだ時、香典に貰つた蠟燭を持ち出し、之を點けて間に合はすれど、

これでは何うも不自由故、洋燈を一個お買ひなされと、頻りに勸めるに、澁甚だ不服ながら、遂に買ふ事を承諾せしが。四條通や寺町へ行けば、澤山洋燈屋のあるのに、尋常の店で買うては、代物が惡くて價が高いと、妙な處へ理窟をつけ、態々博覽會へ出かけて、出品の洋燈をあれかこれかと見較べし末、一番割の安さうなのを、一個買ふ事に約定せり。されど博覽會の規則にて、閉場後ならでは持ち歸り難きに、少しは弱りしが、もはや閉場に間もあるまいと、其儘代を拂ひて立歸り、女房にも誇り居たりき。

さる程に官海の風波定めなく、件の藪坂澁は、間も無く非の字を蒙り、元より月給多からぬ身を、其四分一に減せられて、生計はたと苦しくなりぬ。

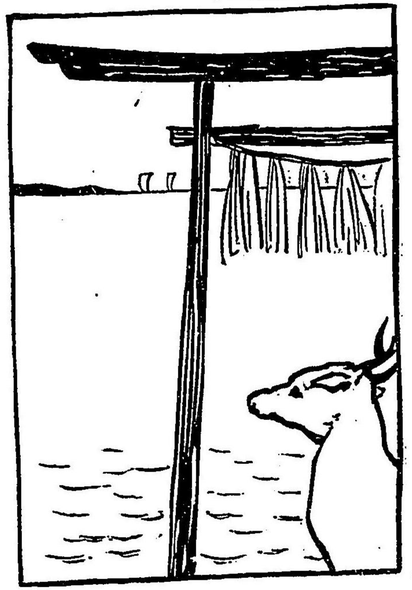
かゝる處へ博覽會よりは、もはや閉場になりたれば、洋燈受取に來るべしとの通知あり。

折から澁は蠶燒けの最中、今頃に成つて洋燈が來たとて、何の役に立たうぞと、受取りて歸りたるまゝ、棚の隅に上げたるのみにて、一度も出して使はず、又以前の如く宵寢をして、下らなく日を送りしに、或る夜何處ともなく、一人の老翁夫婦が枕邊に現れたり。見れば白髮雪の如くと云ひ度けれど、髮と云ふ者は一筋も無く、頭も顏も蜜都盧の如く禿げて、其光り怕明ゆきまでなり。澁は目を數瞬きつゝ打ち見やりて、貴樣は何者じや、と尋ぬれば、老翁ニッコと打ち笑ひ、「御存じなきは道理なり、吾は先頃貴殿に買はれたる、洋燈にて候」と云ふ。澁はつく〴〵瞳を凝らし、「なる程頭の光り鹽梅、コリャ洋燈に相違あるまい。シテ又何の用事あつて、拙者が安眠を妨害せしぞ」と云へば。老翁答へて、「されば御主人！貴殿態々博覽會へ行きて、吾が身を買ひ求めおきながら、未だ一度も御使用

なきは、何の仔細にて候ぞ」。「そは云はでも知れた事なり。汝いかに洋燈たりとも、油が無くては點ること得まじ。其油を求めんには錢が入る、さるに依て使はぬなり。」と、云はせも果ず洋燈の老翁、カラ〳〵と打ち笑ひ、「愚や御主人。油が入ると云うて洋燈を使はずば、初めより買はぬがよし。」「初めは使ふつもりなりしが、今は役所も御免に成つた故、貴樣を使ふにも及ばぬわイ。」「イヤ增々以て愚なり。役所が御免に成たりとて、貴殿の如く毎日毎日、朝から寢て計り暮し居ては、何所より金の這入る口あらんや。それより何か仕事を見付け、洋燈を點けて夜更まで、一生懸命に夜業でもなしなば、以前役所にて貰ひたる、月給よりは多くの儲金あるべし。油の費用は些細な事、寢て居て何の德があらうぞ、早く心を飜へして、ちとマッチの箱でも貼りたまへ。あなかしこ〳〵。」と、云ふかと思ふとあら不

思議や、蹤もる曉の風に吹かれて、ありし洋燈の老翁の姿は、フッと計りに消え失せぬ。

あまりの事の不思議さに、滋は床の上に腕を組みて、暫くはック然と考へ込みしが、忽ち膝をハタと打ち、なるほど洋燈の云ふ通り、稼ぐに追付く貧乏無しぢや、と、初めて夢の覺めたる身の、やがて其翌曉より、塵埃に埋れたる、洋燈を棚より取りおろし、それより夜晝の區別無く、骨牌の札を內職に貼りて、夫婦一心に稼ぎしほどに、何時か金錢も大分に溜まりて、今は役所へ出でし頃より、豐かに其日を送り得るも、偏へに洋燈の德なりとて、晝間は之を神棚にあげ、夫婦毎日手を合せて、南無洋燈大明神！



鹿島落の記

常陸に鹿島、下總に香取、この二柱の軍神が、一葦の刀水を隔つて、東西に對立して居る工合は、彼の陸軍に橘、海軍に廣瀨の兩中佐が、兩花道に現れて、掛合臺辭でもあらうと云ふ所。苟も武士道國民たるもの、之に敬虔の意を表せずして濟まうか。

さるからに、總の香取神宮には、不思議の

御縁で已に二度まで參拜の榮を得た身の、いつも時間と、路次との便惡さに、つい鹿島樣へは御無沙汰に成つて、濟まぬ〳〵と思ふ折から、時節の到來は、この九月二日、其神宮に軍神祭が行はれて、而もそれが十三年振の、午歳毎の吉例とあつては、左無きだに午歳男の、何でう跳出さずに居らるべき。祭事係からの招待、成田鐵道からの案內を機會に、參拜の列末に加はつたのは、宵祭に提灯合戰の壯擧があると云う、一日の朝からの事である。

同じく招待に應じた、各新聞社からの特派員は、已に廿餘人と註されたが、余は又太陽の天溪子、畵報の春浪子、及び寫眞部の如水子を誘つて、所謂る本町組四人、兩國から乘り組んだのは、午前九時三十分の佐原行であつた。

成田で乘替の時、同鐵道の宍戸思無邪氏、——庶務課長兼外交部長として、操觚者仲間

には頗る顏の賣れた人が、今日も接伴員として同乘する事となつた。

見渡せば車中には、朝報社の愛花翁も居る、同じ社の柳洲畵伯も居る、每日の與十大人も居る、又太古遺跡研究家として、水蔭子の合棒たる、朝日の幻花庵主も居る。日報社の吟葉子、中央新聞の雨六老なんど、口手兩八丁の連中、動もすれば口角泡を吹いて、飛沫に車窓を曇らす中に、やがて佐原の停車場に着いたのは、已に正午過であつた。

豫て用意の車に乘つて、それから舟の乘場へ向つたが、そのまた道の惡さ加減、埒も無く車上に弄ばれて、まだ痔の味知らぬ身も、顏を皺めずには居られなかつた。

何と云ふ所か知らないが、只ある川口の、船宿二三軒ある邊に、古びた棧橋が出來て居る。利根川通ひの通運丸は、いつも此所に繫るのであるが、今日は他ならぬ鹿島樣の御祭

禮、東京の御連中が大勢御出になるからとあつて、特に噸數の多いのをまはし、其上等室は、余等一行の爲めに、座蒲團まで別仕立のを出して、ビールにカステラの接待。これに成田鐵道の厚意で、已に上野停車場で仕入れながら、折の數と頭の數との、寺小屋の机では無いが、ちと合ひ兼ねた所から、車中でも開かれず、船宿でも其儘に成つて居た、精養軒製のサンドヰッチを加へて、船棧橋を離れるを相圖に、酒宴の花を咲かせたのである。

否、花と云へば、この一行の若武者武者と（は云へまい）の中に、萬綠叢中の紅二點は、已に兩國から同車して來た、觀世太夫の細君と、其友の某女史であつた。若し太夫が同行であつたら、さしづめ一曲の下物をと、所望された所であつたが、思へば太夫こそ、先見の明ありと云はねばなるまい。

去る程に船は何とやらの堀割を過ぎて、名

にし負ふ潮來近く、稻荷山はあれ、ばら〳〵松はそれ、菖蒲こそ末枯れたれ、出島は彼所、加藤洲は此所、などゝ通がりの指さす頃は、大方空に成つたビール罎を蹴倒し、何時か灰皿に成つた笹折を踏み返して、甲板の上へと爭ひ登つた。

潮來を過ぎると、水路はまた狹まつて、左右の岸の眞菰の穗も、船から摘まれさうな鹽梅。一萬噸の飛脚船に乘つて、スエズ運河を通つた時を、坐に思ひ出されたのである。其中にこの川幅が、又急に廣く成つた。此邊が波逆とか云ふのだらう。もう鹿島は近い筈だが、それかと思ふ森は見えず、却つて香取の杉の御山が、成る程龜甲を伏せた樣に、黑々と雲に際取つて居る。此所畫題ならざる可けんや、柳洲畫伯は又しても葉書の製造。

不意に竹法螺を吹かれた樣な汽笛に、右、香取許りを望んで居た眼を、やをら左へと轉

ずれば、彼方に見える棧橋の側には、大國旗を交叉し、球燈を聯ね、或は滿艦飾式の小旗を、惜氣も無く川風に飜らせて、正是コンノート殿下御着に際せる、横濱埠頭も斯くあらんと云ふ光景。さては誰樣かの御成かと聞けば、思無邪課長扇子をパチ付かせながら、『イヤ、あれは皆諸君歡迎の爲めなので、今に花火も揚りますせ』と、我事の樣に得意がる。

今まで成鐵や通運の接待に、內々記者冥利を喜んで居た折から、此所に又此の大仕掛を見せられては、何やら氣耻かしがらざるを得ず。此分ではあの棧橋に、接待主の鹿島町長も出て居やう、旅館の亭主は云ふ迄も無く、事に依つたら茨城縣下の名譽職連中、ズラリ居列んで居るのではあるまいか。こんな事なら汗に成ても、やはりフロッコート着てくればよかつた、などゝ浴衣の襟をかき合せながら、今更胸を躍らせるのもあつたが、其中に

棧橋に着いて見ると、こは如何に。豫期のシルクハットは半分も見えず、只袴羽織の人一人、『諸君よく來てくれたね』と、挨拶の馴馴しさ。誰かと思へば報知社の櫻巷子。これは其姓の示す如く、鹿島宮司の弟であるから、今日許りは記者の資格で無く、と云つて神官では無論無く、實は二時間前に着いた許かりで、直に接待を頼まれたが、一向勝手が解らんので……と、先以ての辯解、『ハテそんな筈は無い筈』と、思無邪氏そろ〳〵口角を尖らせ初めたが、肝腎の鹿島町の、即ち主人側の者は、何所に居るやら影も見せないに、小言の持つて行き所も無く、取りあへず定めの旅館大國屋の隣居所へ通つた。所が何しろ同勢二十五人と云ふのに、二階は二室で十八畳。何所へ何う陣取つてよいのやら、何れも只うろ付いて居る許かり。此の騷ぎに、何時花火が揚つたやら、それさへ殘念ながら聞き落し

てしまつた。

時計を見ると已に五時。曇つて居るからもう暮れさうだ。暮れてからは提灯祭がある筈。それは是非見度いものゝ一つだが、それよりも見たいのは、名にし負ふ鹿島の神苑。音に聞く七不思議の中でも、要石、御手洗の池、それ等を見免すまいと思へば、明日の朝では都合が悪い。忙しくても今の間に、ざつと一ト廻りしておくと、丁度提灯祭の間にも合ふと云ふ、櫻巷子の言葉に、朝から車や船に許り乘せられて、一向土を踏まないのだから、いつそおひろひと云ふ事に成つて、ぞろ〳〵鹿島へと參詣に出かけた。

尤も豫ての案内狀には、大船津から鹿島までの、自由乘車券まで添へられて、頗る行き届いた事であつたが、さて大船津に着いて見ると、乘らうにもその車が無い。否、その車がある程なら、初めから乘車券は出すまいな

どゝ、そろ〳〵皮肉を云ふ者が出て來た。

芭蕉翁の遺跡だと云ふ、根本寺を畑越しに見て、長い坂を一つ登ると、もう鹿島の町へ入つた。町と云つても不揃ひな家並。その軒に釣つた獻燈も、思つた程は振つて見えなかつたが、只流石に目を惹いたのは、辻々に立てられた、大竹に鈴生り提灯。何の事は無い、大人國の南天の實と云ふ有樣、これを晩には燒くのだと聞いた時は、その壯觀も想はれた。

その壯觀に對して、寧ろ奇觀珍觀とも云ふべきは、町々の山車であらう。凡山車の人形と云へば、賴朝公とか、日本武尊とか、神功皇后とか、鎭西八郎とか、大方相場が極まつた樣に覺える。それに又これは何事ぞ。雜子ケ谷土産の看板かと思ふ、大きな木兎が眞先にあるから、次が達磨と云ふ洒落かと思へば、梭欄箒に魔が魅した樣な、恐ろしい唐獅子が出て來た。さうかと思ふと、沐猴の冠では無

くて、紙屑籠を冠つて、蚊帳を纏ひつけた、頗る茶番氣のある狸も見えた。何の事は無い、よく聯隊旗祭の時に、兵營内で見る作物の古手を、其儘山車に載せた樣な鹽梅。これに阿波囃子と云つて、鼓入の異樣な囃子を添へたまでは、寧ろ俳諧だと嬉しがる者もあつたが、その山車の正面に、「金何圓誰樣」「酒幾駄某殿」と、場末の床屋で見る樣な、しみたれた紙のビラを、麗々しく貼り立てられたには、頗る御座の覺めざるを得ない。

さて社殿へ參拜して見るのに、香取のそれとさまで見劣りはせぬが、彼はやゝハデなのに對して、これは少しくヂミに見受けられた。その社殿の後から、神苑の木立の間を、御手洗の池へと向ふ道は、二頭立の馬車でさへ、自由にドライヴも出來得べき、神代ながらの杉の木立は、常に空を遮つて、その神寂びた景色は、彼の春日の神苑にも、何所か似て居

る樣に感じた。

御手洗池と云ふのは、急な坂の下にあつて、山蔭の人造池に過ぎないが、その水の清冽な事と、大人が入つても、子供が入つても、深さが乳までと極まつた所に、所謂る不思議は存するのだが、『まてよ一番試してやらう』と、飛び込んで見る名所荒しは、幸ひ一行の中には無かつた。

この坂を上つた所に、何やらの社があるが、その前にまた不思議な石がある。それは四角な柱の樣な石だが、その上部の側面の、凹んだ所に耳をつけると、地獄の釜の音が聞えると云ふ。これは小波式だと云はれて、一番に耳をつけて見ると、成る程ゴーゴーと云ふ樣に聞える。但しそれは釜の音よりは、風の音に近かつた。

この社の後を二町ほど行つて、木立の中にあるのが要石だ。この下には例の大鯰が、ギ

ウと留めを刺されて居るのだと思ふと、之にも耳をつけて見度かつたが、周圍に柵が結はれて居て、大分勿體らしく見えたから、遂に手さへ觸れなかつた。尤もこの石の周圍には、誰か坐つて見た痕がある。例の好事かと思ふとさうで無い。これは斯して掘る間に、何か虫を一匹でも掘り出すと、其歳に懐姙る兆だとか云つて、子の欲しい連中がやる事だとやら。世に產氣のつくのを、虫が被ると云ふ事も、ハヽア是からだナと横手も拍たれた。

虫と云へば、御夢想だと云ふ齲齒の藥も、此石の側で賣つて居る。何が入つて居るのか知らぬが、赤い巾につゝんだ者を、痛む齒で咬んで居れば、直ぐに癒る事不思議と云はれて、余も御多分には漏れなかつた。

此邊を見物して居る中に、大分暗く成つて來た。提灯燒きも間があるまいと、何れも社務所近く引揚げ、此所で御札を頂くのかと思

へば、實は紀念の畫葉書を買ひ取り、紀念スタンプもスタンプだが、序に御社の御印もなどゝ、各自に紫のや朱いのやを捺してもらひ、更に何やら館とか云ふのへ來て、此所で休憩する事となつたが、元より空家同然の所、お祭で手が廻り兼たとは云へ、燈火さへ急に出ないと云ふ有樣。只見る薄闇い玄關に、大の男がウヨ〳〵居並んで、藪蚊の餌食に成つて居る圖は、貧乏寺の御通夜に來たと云ふ有樣。俘虜收容所だつて、日本のはもつと氣が利いて居た筈だと、彼方の隅で呟けば、イヤ何しろ軍神祭と云ふのだから、皆從軍した氣で居ろと云ふのだらうと、何所かで心細い聲も聞える。

半主半賓の櫻巷子は、此際同じく腹を減らして、八方に奔走を試みたが、所謂祭事係なるものゝ、頗る不得要領の爲めに、辛うじて澁茶に握鮓を持ち込んだ頃は、已に八時に近

かつたらう。

是より先、余はあまりの馬鹿々々しさに、獨りこの休憩所を出て、宵祭の景況を見に廻つたが、それすら東京に於ける、場末の縁日ほどにも脈はず、せめてもの慰みには、今は珍らしく成つた「からくり」の語り聲に、腕白時代の昔時を偲んで、其前には思はず足を停めた。

其中に、樓門の前の廣場で、パッと火の手か揚つて見えた。スハ提灯燒の初まりぢやと、例の休憩所から出て來た連中と共に、設けの席に着いて見たが、これも樂しんだ甲斐も無く、見ると聞くとは大違ひ、豫て描いて居た壯觀は、『なんの事だ』の一言に、忽ち掻き消されてしまつたのだ。

第一、先刻途中で見た、彼の大人國の南天の實、あれが皆眞赤に成つたら、これ許りでも見物であらうと思つたのが、今見ると、そ

の中に只二つか三つ、甚しいのは只一つより點してなく、それを定めの燒場へ持つて來て、燒くのかと思へば燒きもせず。燃えたと思へば燻つてしまふ。何の事は無い、下手な「蚊いぶし」を見せられたまでだ。

但し此際を警戒して居る、白衣の査公の夥しさ。その手にある提灯こそは、成る程提灯祭たる所と、初めて點頭かれた位である。

然るに何事ぞ。此の邊の掏摸の素速さ。これほど嚴重な警戒の中に——殆と參詣人の數より多い、警官達の眼を盜んで、抜きも抜いたり、掏りも掏つたり。愛花翁の洋傘と、春浪子の懐中時計とは、何時の間にやら其の獲物にされたが、憚ながらの江戸ッ子が、鹿島三界まで遙々下だつて、而も二人まで此仕末とは、間抜の廣告に來た樣なもの。これも腹さへ減つて居ずば、かうまで不覺は取るまいにと、後で恐癡を醜すまい事か。

ケチも斯うつゞいて來ると、有難い御社の前も、何となく居心惡く成つた上、何しろ「ひだるさ」が承知せず。此上ははやく宿へ歸つて、ゆつくり夕飯にありつくに如かずと、何れも急いで大船津へと志ざし、さて大國屋に歸り着いたが、部屋は依然として十八疊、人數も相變らず二十五人。今夜は此所に何して寢るのか。雜魚寢は大原の名物と聞いたが、さては此所でも流行るのか知らぬ。何にしても汗を流してと、湯殿へ行けばこれはしたり！只さへ風呂は利根の川水。それに雨上りで濁つて居る所へ、壺から五十人餘りの客を入れて、今は湯槽の一隅から泥沼瓦斯が立ち昇ると云ふ仕末。これは堪らぬと脱いだ肩を入れて、鼻を摘まながら座敷へ歸れば、女中は緣側から覗き込んで、頭數を算へて居る樣子

―先刻一度寄つて居るから、人數も已に解つて居る筈、今頃はお歸りの時分と、少くとも

も膳立位は出來て居るだらうと、實は內々樂んで居たのに、これは又情無い。今頭を算へて居る樣では、是から米を淅ぎ初めるとして、それが飯に成る迄には、東が白みはしないかと、ひどく悲觀する連中もあれば、斯うと知つたら家を出る時、干飯か道明寺を仕入れて來たものをと、悔んだ所でもう追つかず。まよ果報は寢てまてと、勝手に押入から夜具を出して、ごろり〳〵と横に成つたが、身體は臥ても、立つた腹！果は形勢不穩と成つて、そろ〳〵躍起組の鼻息荒く、町長の不行屆を罵るやら、祭事係の無責任を怒るやら、山雨將に來らんとして、風堂に滿つ底の光景。其癖宿の下女なるものは、手を鳴らしても容易に來ない。

斯うなると、櫻巷子は靑く成る、思無邪子は赤く成る。元より二子の知つた事では無いが、所謂板ばさみの體とあつて、二人の寄せ

る八の字は、〆めて十六字と成つては居るが、千松二十有五人、〆めて二萬五千松を、奈何ともする事能はず。兎も角も祭事係を呼べと急使を鹿島町に走らせれば、之に應じて係長の某、風采卑しからずして、聞けば縣會での口利とか云ふ人物、來るより平蜘蛛の如くに成つたが、臥そべつた連中狸を極めて、之に挨拶をさへ返へさぬ仕末。

兎に角何とか致さねばと、櫻巷、思無邪の二子は、某を拉して下座敷に立て籠り、善後策を講じに掛つたが、所謂躍起組の氣焔は、時經るまゝに愈々猛烈と成つて、果は中央に立あがり、『事此所に及んでは、國交斷絶の他は無いのだ。先刻の提灯の樣子で見れば、明日の祭禮も大方讀めた。かゝる虐待を受けてまで、未練を殘す要はあるまい。我等は須らく旗を捲いて、今夜の中に引揚るに如かず』と、演說口調に辯ずる者があると、何れも臥

ながら手を鳴らして、喝采樓を動かしたが、さてよく考へて見ると、此所は名に負ふ鹿島の鄕、船が無ければ歸られないと聞いて、又大いにしよげてしまつた。

すると、先刻から此所へ來合はせて、此場の樣子を見て居た通運會社の接待員、姓を倉田と云ふ人あつて、此の時徐ろに口を開き、『萬已むを得なければ、船は出せない事も無い』と、うつかり口をすべらせたを、地獄耳に聞くが速いか、岸破と許りに跳ね起きて、『イヤ、それでこそ我が通運會社だ。さう云ふ事が出來るなら、是非船を出してくれたまへ！　さ、諸君起きた、起きた。起きて通運會社の萬歲を唱へた！』と、兇徒嘯集の喇叭を吹いたのは、誰あらうそんじよ其邊の、腕白將軍其人であつた。

すると此喇叭の聲には、誰か今更逡巡はう。『ソレ非常召集だ』『武裝々々！』の聲の下に、

我も〳〵と浴衣を脱ぎすて、暫く間に衣服を着て、又もや御意の變らぬ中と、急いで此所を引揚げた時は、花道ならぬ線側まで、はや膳部も運ばれて居たが、一旦歸ると決心して、臨時の船まで誂へたものが、何で今更引返へされう。この膳に目をくれる者は、七生までの絶交だぞ、などゝ凄い文句さへ吐いて、先を爭つて船に乘つたが、見れば其時がもう十時、是から佐原へ行つた所が、元より汽車の出る筈は無く。事に依つたら宿も無くて、路頭に迷ふ樣な事では、後悔しても追付くまい。兎角短氣は損氣だから、お腹も立たうが今晩の所は、まげて御留まり下いと、例の思無邪、櫻巷の二子、係長の某と共に、七重の膝を八重とすれば、三八二十四重に折つて、詫びながら留やうとしたが、此時はもう一行が、船の一室に車座と成つて、きはどい所で機轉を利かした、如水子の臨時徴發に、鮓もあれば

酒もあり、ぐつと氣の強く成つた所だから耐まらない。折角の課長の遊説も、『乘りかけた船が降りられやうか』と云ふ、天溪氏の警句の下に、水と際消える泡と成つて、却つて船を追ひ立てられ、間をつん裂く汽笛一聲、船は遂に棧橋を離れた。

此時船中を見渡せば、これはしたり！　往には二十五人あつた一行が、先刻のドサクサ紛れに、つい軟化する者もあつて、主從とは云へないが、同業都合十八人。七騎落には十一人餘るが、二九は憎いに通ふ十八、飛んだ憎まれ役をつとめて、今更後悔の至りに堪へず、即ち罪滅しの爲めに、茲に鹿島落の記を作る。穴賢々々。

是から一行は佐原に着いたが、其時は午前二時。けれども金田屋と云ふ宿は、深更ながら快く迎へて初めて一同人心地を得。ゆつくり寐て次の朝は、更に成田に路艸を食つて、此所でも大野屋の款待を

受け。更に石川照勧師の好意のお土産精進料理を貰つて、午後五時の汽車に乘れば、恰も昨夜の軟化組が丁度同じ汽車に乘合せて居たが、聞けば今朝は雨の爲めに、果して祭禮し張想通りに行かず、君等はうまい事をやつたよと、例の思無邪子の程の好さ！

梭の音

梭の音は、誰に着しよとて機織の、虫にはあらでしほらしや、賤が伏屋も夜仕事の、障紙にうつる島田髷、アレ生垣に見え隱れ。

潮來蕪詞

▲菖蒲咲く潮來出島は、彼の黄門が好事の小唄、今に傳へて長き袖の、舞妓として此舞知らぬを耻づれば、文士として此地知らぬも面伏なめり。今年は恰も菖蒲月の廿日、再び香取に詣でし歸途、舟を名にし負ふ津の宮や、濱の鳥居の傍より出だして、其處に一日の雅遊を試む。同行は紅葉、桂舟、水蔭、思案、眉山の五子、是に吾と舟人とを加へて、彼の佐殿が眞鶴の故事に、其數の似通ひたるも嬉し。

舟にして　坂東太郎青嵐

▲その大利根を斜に越えて、水門を津宮新田に入れば、折からの苗代田に、夕風綠の波を打たせて、それも水かと疑はしきを、笠着て脛もあらはなる男の、其處此處に立働ける見れば、何處も業に怠は無かりき。

苗代や舟から運ぶ水車

▲已にして加藤洲に入る。別に十六島と云ひて、これより潮來の中なるべし。餘所ならば葭蘆なるべき、その小川の入口には、一面の眞菰生ひ茂りて、行く手の流も見え分かぬ迄なるに、時に鳴く行々子ぞ、さながら吾等を案内顔なる。

行々子眞菰の風に追はれけり

▲此流れ元より清からねど、かゝる沼地の井戸求むべくもあらねば、此島に住まん程の者、皆その小川の水を用ひて、之に漱ぎ之に浴みし、之に炊ぎ之に化粧す。聞いては嘔を催すべきに、馴れては眉も顰ますや。

米洗ふ側によし原雀かな

▲一時許りにして潮來の町に着き、只在る水邊の旗亭に投ず。浴後稻荷山と云ふに登れば、遠く龜甲山を暮靄の裡に見失ひて、近く加藤洲を蛙聲の間に望む。

蛙鳴く十六島の夕かな

▲此山つゞきに、一叢の古松の雲を摩するあり。潮來のばら〳〵松で、小唄に稱さるゝは是ぞ。時に暮色增々深く、杜鵑を天の一方に聞く。

雨やいざばら〳〵松の時鳥

▲夕餉の後、微醺の頰を川風に吹かせて、徐ろに欄によれば、前は例の十六島なるに、それかと思ふ灯火も見えず。月には疎うなりける宵を、蛙の聲のみ徒らに繁くて、やがて雨を呼びけるぞ憎き。

加藤洲の螢未だし五月闇

▲明けては鹿島へ渡る可かりしに、生憎風さへ加はりたる雨の、遂に航路を遮りたれば、再び昨日の小川を漕がせて、十六島を利根へと横切る。元よりさまで廣からぬ舟に、大の男六人乘れるを、上より苫もて蔽ひたれば、何れも暑さに耐へ兼ねて、幾度か苫を拂ひ、

濕れぬ先こそ厭ふべけれ、露に菖蒲の一入しほらしきを、何でう仇に過ぐさるべきや。

苦あげて菖蒲の雨に濕れてけり

▲津宮新田の邊に、昨日は心付かざりしが、比丘尼塚と云へるを見る。或時旅の尼此處に溺れしを、里人の此處に葬むりしなりとぞ。

蘆荻一際茂れる中に、小さき標の石を建てゝ、傍に卒塔婆の斜なる、川柳の淋しげなる、誰かは憐を催さゞらん。

しほらしの菖蒲も咲かず比丘尼塚

▲新田の小川に入りし頃より、空漸く晴れて、風さへ凪ぎたれば、やをら頸をさし伸べて、其邊見渡すに、折ふし正午に近く、田に笠の陰も見えねど、舟に茶を煮る煙立つなり。

早乙女の舟に戻りし午餉哉

▲世に十二橋と稱やせど、まことは四十九橋とや。家あれば橋、橋あれば舟、かの伊太利のヴェニスの町を、暫らく鄙樣に作り變へたらん樣にて、吾等都も山の手に住み馴れし目には、見るほどのもの珍らしからぬは無し。

漕ぎ分けて行く蚊柱や橋柱

▲まことにこの里は螢の名所とて、夜は星降る眺ながら、一失は又これに伴うて、是も水に產まるゝ蚊共の、蚤も鼻打つ許りなるはうたてし。

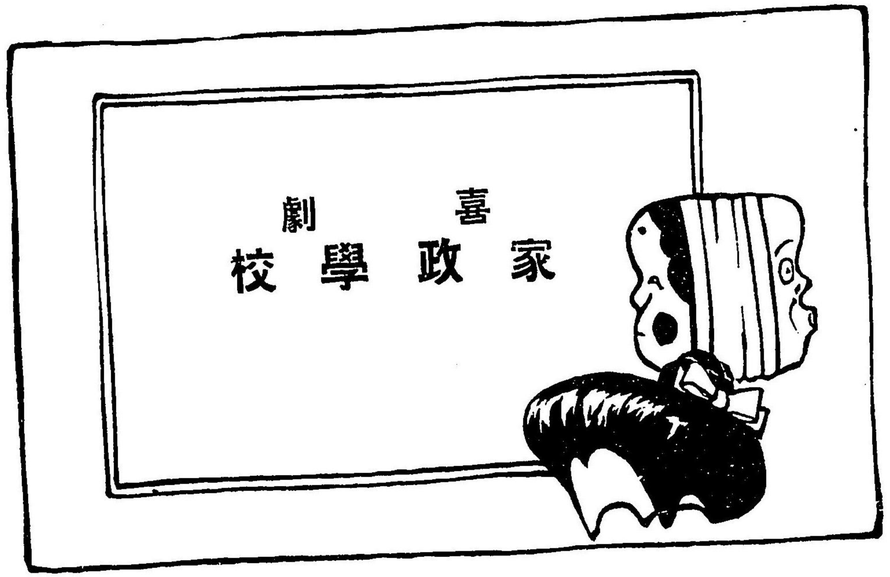
蚊柱の立や小橋の片欄干

▲聞及ぶ菖蒲は何れぞと、舷に伸び上がれば、行きかふ舟に女ありて、あれぞと指さす杭の陰に、二本三本咲き出でたる、しほらしさは其多からぬにこそ。

嬶が舟菖蒲を除けて通りけり

▲兎角して佐原の堤に着く。此處に舟を乘りすてゝ、やをら今來し川面を見れば、水洋々として萬頃碧に、風拂々として十里黛ばし。

舟を出て立つや堤の青嵐


喜劇
校學政家

▲場所　山野家の一室
　　婦人松子の居間

▲登場人物

△山野夫人松子（四十歳位）　△同　姫花子（十七歳）
△女學生貴美子（十九歳位）　△同　羽根子（同　上）
△同　宇佐子（同　上）　△同　志保子（同　上）
△山野下婢お清（十九歳位）

以上

注意　これは女許りで出來る喜劇。即ち女學生の學校芝居として、獨逸の其向きで喝采されたものです。我邦の時弊にも適切の樣に思ひましたから、今試みに飜案して見ました。皆さん試みに御讀み下さつたら、又試みに演つて御覽遊ばせ！

第一節

松子夫人　お清

松子夫人火鉢の側で裁縫をして居る所へ、下女お清慌しく入つて來て、

（お清）　奥樣、〳〵！

（松子）何だねエせわしない！　又地震の豫報でも出たのかエ？

（お清）地震ぢやア御座いません。あの……お嬢様が……大變で御座いますよ。

（松子）エッ、嬢が何をしたの？（ト少し慌てゝ裁縫を押退る）

（お清）いゝえ、まアお聞き遊ばせ、あの、御肴が……。

（松子）何だねエまア、お肴なのかエ？

（お清）所が奥様！　そのお肴が大變なんで御座いますよ。私がお敎へ申上げても、ナニいゝよッてお聞き遊ばさないもんですから、とう〳〵眞黑にお焦がし遊ばして、それに頭も尻尾も、グジャ〳〵に成つてしまひましたから、もう召上る事も何も出來や致しません。

（松子）まア、仕方が無いねエ！

（お清）それかと申しますのが、お嬢様が御料理を御嫌ひ遊ばして、どんなに御勸め申し

ましても、御稽古遊ばさうと云ふお氣が無いからで御座います。先達ても左様ぢやア御座いませんか。お吸物に鹽を御入過ぎに成つて、折角の御客様に、御燒物許りで御飯の出た事が御座います。かう云ふ辛い御汁の出來ますのも、つまりは奥様があまり御甘過るからで御座います。たまには御小言を仰有つて、ちつとかう云ふ御稽古にも御精の出る様に遊ばしませな！　そりやア當節の御嬢様の事ですから、音樂とやらも御嗜好なさらなけりやア成らず、舞踏とかの御稽古も御大事で御座いませうが、またお料理も一通りは御存じないと、後へ行つて御損で御座いませう。……ホ、、、まア、私とした事が、飛んだ生意氣な事申し上げまして、何卒御勘辨遊ばしまし！

（松子）なアに、よく云つてお呉れだつた。けども〻う安心してお呉れ！　私もその事は

氣が付いてるので、いよ〳〵今度はあの花子を、家政學校へ入れる事にしたから……。

（お清）（手を振りながら）駄目、々々、駄目で御座いますよ。奥樣！　さう申しちやア失禮で御座いますが、あのお嬢樣の樣なお氣で、何うして家政學校へ入らつしやれませう。此間も斯うなんで御座いますよ。家政學校の評判が、大層宜しい樣で御座いますから、入らしつては如何で御座いますッて、私がお勸めしましたら、『厭な事だワ、あんなお裁縫やお料理許り敎へる學校、私死んだつて行きやアしない』ッて、大層な御權幕で御座いましたもの。尋常大體の事ぢやア、とても入らつしやりやア致しませんですよ。

（松子）それだから私だつて、實は少し仕組んだ事があるのさ。

（お清）ヘエ、仕組んだ事とは！

（松子）これならあの花子も、屹度行く氣になるだらうと思ふの。

（お清）まア、何う致すんで御座います？

（松子）一寸御出で！　斯うなんだよ。

ト、招く。お清すりよつて、

（お清）御免遊ばせ！

ト、耳を一寸搔いてからさしむける。松子それにひそ〳〵と語らう。お清點頭く事あり、

（お清）ヘエ、まア……よく御考へ遊ばしましたこと。

（松子）だからお前もその氣に成つて！　い、かイ！

（お清）畏りまして御座います。それぢやア私も役者の氣で、うまく演つて御覽に入れませう。（氣込）

（松子）シッ、花子が來る樣だ。（ト、制す）

（お清）ではまた後程！

ト、お清は會釋して勝手へさがる。

第二節

松子夫人　花子

花子、次の間から出て來る。但しその左の指は、二本許り繃帶して居る。

（花子）ア、痛い〳〵！　もうあんな事慾々だワ。阿母さん！　これ！　私此間切つた所を、又こんなに火傷しちまつたワ。（ト、泣聲に成つて甘へる樣に云ふ）

（松子）（わざと厳しく）またそんな意氣地の無い事を！　お前もう十七にも成つて、何と云ふ人だらうねエ。

（花子）だつて阿母さん！　私にやアあんな事性に合はないンですもの。

（松子）お料理が性に合はなければ、此所へ來てお裁縫でもなさい！

（花子）お裁縫？……お裁縫も何だか虫が好かないワ……。

（松子）何と云ふ氣隨な子だらうねエ。それで

お前今時の娘が濟むとお思ひかエ？

（花子）アラ、阿母さんそんな事云つたつて、今時の婦人は、お裁縫やお料理より、まだ他に爲なけりやア成らない事が、いくらあるか知れやしませんワ。慈善事業、社會問題、赤十字社、愛國婦人會……ほんとに是からの婦人てエものは、恐圖々々しちやア居られない事よ！

（松子）それでも女は女だから……

（花子）いゝえ、女だつて人間ですワ。阿母さんなんぞは、昔時の事許し考へてるから、ぢき引込思案に成つちまふけども、今の女子教育ぢやア、そんな事は流行らないワ。

（松子）そんな事つて？　何がだエ？

（花子）そんな、お料理やお裁縫なんぞ！

（松子）ホ、、、そんならまた、何うして家政學校なんてエものがあるのだらう。而も大層評判が好いぢやないか。

（花子）そ、そりやア、入る人が違ひますワ。

（松子）入る人が違つたッて、矢張り女は女だらう。

（花子）女は女だつて、……女が違ふワ。

（松子）まア、それぢやア家政學校へ行く樣なのは、女の中の女だけでも、お前の樣なのは、女の中の男とでも云ふのかエ？

（花子）アラ、何とでもお云ひなさい！（ト、少しふくれる）

（松子）（氣を更へて）そんならそれで可いとして、それぢやアお前は、全體何樣な事が習ひ度いンだエ？

（花子）何樣な事ッて、もつと時勢に適切な事が習ひ度いワ。

（松子）然う、それぢやアお前の好きな樣にお爲！　が、花子や！　今日はねエお前に、新しいお友達を紹介せやうと思つて子、阿母さんが此間から、餘所の御嬢さんを三四人、お招き申しておいたから、今に屹度お

見えに成るだらうよ。

（花子）餘所の阿嬢さんて……　どんな方？

（松子）お前よりは年が行つてらつしやるけども、みんな當世風の教育受けた方ばかりだから、屹度お前の氣に入るたらうと思ふよ。

（花子）まア、嬉しい事！　早く入らつしやればいゝのねエ。

第三節

同上　お清

お清次から出て來て、松子に名刺を渡しながら、

（お清）この方が入らつしやいました。

（松子）（名刺を見て）オヤ、もう入らしつたよ。それぢやア早く、清や！　あの……お蒲團をお出し……序に他の方のも……

（お清）ハイ！

ト、お清は急いで席を設ける。花子はいそ〳〵しながら、その名刺を取りあげて、

（花子）色澤貴美子……まア、洒落た名刺だ事。

（松子）その筈さ！　その方は畫をおかきに成るんだもの。清！　何卒お通し申して！

（お清）ハイ！　（ト、次へ出る）

第四節

同上　貴美子

間も無くお清の案内で、貴美子女畫師の扮装にて入つて來る。その手に畫具箱と三脚とを携へ、今寫生の歸途と云ふ體。

（貴美子）今日は！　何うも難有う御座いました。

（ト、無造作に席に着く）

（松子）（挨拶して）よくお出で下さいましたねエ。アノ……これが娘で御座います。何卒御懇意に！　花子、御挨拶なさい！

花子は無言で辭儀をして居る。

（貴美子）まア、お嬢樣！　初めて御目に掛りますのねエ、何卒以後御心安く！

（花子）ハイ、私も？

（貴美子）花子さん！　貴女も畫を遊ばして？

（花子）少々！　學校に居りました時分。

（貴美子）圖畫でせう。そりやア誰でも致しますワ。私伺つたのは、別にお習ひ遊ばしたか何うだかッて申すんです。

（花子）まだ何誰にも……

（貴美子）アラまア……なぜ遊ばしませんの？はやく遊ばせよ。畫はほんとに宜しう御座いますよ。第一貴女、畫をやつて居りますと、自然と趣味と云ふものが出て、色彩の配合が上手に成りますから、一寸衣服を拵へればと云つて、何うしても良い嗜好が出來ますよ。またこの『自然』の美ですねエ。この自然の美を解すと云ふ事が、ほんとに人生の最上の快樂ですよ。隨分世間には明盲があつて、折角自然の美に接しながら、これを解しない人がありますが、ほんとに此等は、人生の不幸ぢやアありませんか。は

やい話が、まアこの窓から見て御覽なさい！

ト、進み寄つて窓をあける。花子も釣られて外を見ながら、

（花子）アラ如何しませう、阿母さん！　まだ垣根が倒れたまゝだワ。草もまだ刈つてない事よ。

（松子）ひどい所が見えるねエ。はやくお閉めなさいな！

（貴美子）いゝえ、閉めるにやア及びません。あの垣根の倒れた所、艸の伸びた所が、即ち自然の美ぢやアありませんか。あれがちやんと成つて居ちやア、不自然に成つて卑しく成ります。美は却つてあゝ云ふ所にあるので。あゝ、ほんに好い畫題だ事！

（花子）いやアねエ！　此人は人を馬鹿にしてるんだよ。（ト、獨語に咬く）

（貴美子）最も不自然のものだつて、人工の物にも美はあります。例へば器物や骨董品——

私の方で云ふ靜物ですねエ。靜物はまた靜物で、隨分面白い研究も出來ますが……それよりも面白いのは、動物の寫生ですねエ。例へば牛の鳴いてる所だとか、犬の咬み合つてる所だとか……。

（花子）まア厭だ！　牛だの犬だの……。

（貴美子）牛や犬が嫌ひで、何で畫工に成れませう。私なんざア寫生と成りやア、蛇でも恐かアありませんよ。

（花子）オ、厭だ！（ト、眉を顰める）

（貴美子）蛙でも平氣で捕まへますよ。

（花子）アラ……。（ト、身を震はす）

（貴美子）美を研究する上から云へば、恐いの、汚いのなんて、そんな事云つちやア居られません。却つてなまじ人工を加へた、不自然なのが醜いものです。例へば……（ト、見まはして床の生花に目を落け）あの花なんぞも、おなじ活けて眺めるなら、丁度野に咲いてる通に、自然の形

を殘しておいて頂き度いものですねエ。あんなくねらしたり、ひねらしたり、私達の眼にやア少しも美ちやアありません。恐らく美を解する者は、屹度私と同感でせうよ。失禮ですが、今の間に一寸直してあげませう。

ト、進み寄つて、遠州流に活けてある花を、無造作に取つて枝を伸ばし、普通の投込にしてしまふ。花子ハラ〳〵しながら、

（花子）まア阿母さん！　折角私が活けといた花を……

（貴美子）アラ、貴女がお活け遊ばしたの？　そんなら猶申さなけりや成りませんねエ。畢竟こんな不自然な事を爲さるのも、畵をお習ひなさらない故ですよ。畵の道へ入つて、ほんとに美と云ふ物が解つて來ると、とてもこんな事は出來やしません。御覽なさい

！　大變よく成つたぢや御座いませんか！　先刻と大差異ですよ。

（花子）……。（呆れて物も云へぬこなし）

（貴美子）ねエ奥樣！　さうで御座いますワねエ！

（花子）はア……。（ト、意味あり氣に云ふ）（ト氣の無い返事。其儘何か目配する）

（貴美子）（氣を更へて）それはさうと、まだ他の方は入らつしやいますまいねエ。其間に一寸、私はスケッチをして參りませう。あの垣根の倒れた所が、ほんとに好い畵題ですから。……奥樣御免遊ばせ！　花子さん！　後刻！

ト、貴美子は畵具箱、三脚を持つて、とつかはと次へ出てしまう。

第五節

同上（但し貴美子お消）

松子は花子と顔見合はせて、

（松子）何うだエ、畵工のお嬢さんは好い方ぢ

やないか。お前氣に入つたらうねエ。

（花子）あんな人！　私大嫌だワ。

（松子）まア……然うかねエ？

お清次の間から出て、

（お清）眞鍋さんのお嬢樣が入らつしやいました。

（松子）オヽ、羽根子さんが？　直ぐに此方へ！

（お清）畏りました。（ト去る）

（松子）ほんとに羽根子さんなら、屹度お前と話が合ふよ。

（花子）さう？　どんな方？

（松子）何しろ大層學問のある方だから。

（花子）まア頼もしいのねエ。

第六節

同上　羽根子

羽根子は洋服扮裝、金縁の眼鏡を掛け、洋本二冊許り手にしながら、ギス〳〵歩いて席に着く。

（羽根子）今日は！　昨日はお手紙を難有う御座いました。（ト、凡て巡口に甲張つた調子）

（松子）いゝえ、お忙しい所を御出でを願つて、何の御愛想も御座いませんが、只花子を、皆さんにお紹介申し度いと存じまして。

これにて羽根子は、花子の方に捻ぢ向き、

（羽根子）まア左樣ですか。お嬢さん！　私眞鍋羽根子！　何卒御親近に！（ト、手を出す）

（花子）（手を出して握られながら）何卒宜しく！（ト辭儀をする）

（羽根子）何ですねエ、二十世紀の婦人が、そんなに頭を下げるもんぢやありません。だから日本の婦人は、無教育だの、卑屈だのつて、世界各國から笑はれるんです。然し花子さん！　貴女も學問がお好きださうですが、是まで隨分御勉強なさいまして？

（花子）はア、少しは？

（羽根子）さう。然し學問にもいろ〳〵あります

が、まアおもに何學を？

（花子）理科もやりましたし、それから化學も……。

（羽根子）理科にもいろ〳〵あります。動物、植物、地理、天文、數學、物理、人類學、考古學、……化學だつて又さうです。純正化學、應用化學、藥用化學……貴女のはその中何れですか？

（花子）私……只學校で敎つたんですから。

（羽根子）學校つて、大學ですか？

（花子）いゝえ、高等女學校！

（羽根子）あゝ、高等女學校なら知れたもんですワ。理科だつて、化學だつて、ほんの總論許りですもの、學問とは云へやしません。

（花子）はア……（ト、少し赤く成る）

（羽根子）私の伺ふのは、眞の專門の學課の事ですよ。さう申しちやア自慢する樣ですが、私ア高等女學校を出てから、まだ三年にし

か成りませんが、その間に隨分勉强致しましたよ。はア、學問も大方各科を究めて見ました。尤も私の姉も學問好で、醫學の方に志しましたから、私やアわざと哲學から初めて、心理學、倫理學、比較宗敎學や純正哲學を修めて、それから社會學、敎育學、審美學と研究し、哲學にやア何うしても理學の智識が要りますから、今度は理學に移りましたが、それも力學だの光學だの云ふ、みんな高尙なもの許り。序に生理學も一通りやつて、生體解剖も隨分實習しました。

（花子）まア、よくそんなに種々な事が？

（羽根子）なアに出來ない事がありますものか！まだその他に、私やアまだ我邦に、女の博士の出ないのが、何うも遺憾で成りませんから、理學と文學とで、都合二篇の論文を出しましたが、もう何とか沙汰のある筈です。それで今度は、政治、經濟、法律の方

も、順々に修める心算ですが、哲學や理學から見ると、此等は皆淺薄なものですから、別に頭腦も入りやアしません。

（花子）ほんとに貴女は、非常な精力がおあんなさるのですねエ。

（羽根子）精力？　貴女精力ッて事御存じですか？

（花子）……でも、よくそんな種々な事が？

（羽根子）種々な事が出來るのを、精力だと思つてらつしやるの？　それだから、まだ〳〵貴女は學問が足りません。抑も精力と云ふものは、理學上にも哲學上にもありますが、これには深重な意味があるので、苟もその意味を解した者には、輕々しく使はれる語ぢやありません。それより花子さん、貴女に好い物見せてあげませう。いゝえ、これも學術の研究ですから、ようく見てお置きなさい。私今途中で買つて來たんですが、

貴女なんぞはこれを見て、屹度人間のだとお思ひでせう？

ト、云ひながら、手に持つた本を明けて見せる。中には動物、人體などの解剖圖あり。

（花子）まア氣味の惡い畫ねエ。（ト眉を寄せる）

（羽根子）氣味の惡いなどゝ云ふ考で、眞の學問が研究できますか。それぢやアこれを御覽なさい！

ト、羽根子はわざと氣味惡き圖を明けては見せる。花子見る度に顏を皺め、遂には座に堪へぬ體あるべし。

（花子）阿母さん！　私一寸……（羽根子）御免遊ばせ！

ト、用あり氣に立つ。

後、松子羽根子と點頭き合ひ、羽根子はやがて庭の方へ出てしまふ。

第七節

松子夫人、花子、宇佐子

花子また出て來て、

（花子）阿母さん！　飛井さんのお嬢さんですッて！

（松子）宇佐子さんだらう。お通し申しな！

（花子）いま清がお連れ申すのよ。羽根子さんは？

（松子）今お庭の方へ入らしつたよ。

（花子）ヤレ〳〵助かつた。

（松子）何だねエ……あんな學問のある方は無いのに、お前逃げてしまふんだもの。

（花子）だつて私、あんなむづかしい事許りべラ〳〵べラ〳〵獨り喋つて、頭痛がして來たぢやありませんか。

（松子）でも、お前の好きな學問の……。

（花子）學問のある人私もう大嫌ひ！

此所へ飛井宇佐子、改良服に自轉車乘の

袴を着け、汗を拭きながら、活潑に入つて來る。

（宇佐子）今日は！　お暑い事ねエ。

（松子）まア宇佐子さん！　よく入らしつた。相變らず活潑なお風俗ですねエ。またお馬ですの？

（宇佐子）いゝえ、此頃はもう自轉車なのよ。（花子を見返り）この方がお嬢さま？　花子さんと仰有るんでせう。私飛井宇佐子、阿母さまには毎度御厄介に成つて居ります。何卒御懇意にねエ！（ト、凡て朗しき調子）

ト、紹介を待たず挨拶する。花子少し煙に卷かれた體で、無言に辭儀をする。松子座を繕ひ顏に。

（松子）花子や！　宇佐子さんはほんとに活潑で、運動なら、何でもお出來に成らない物は無いんだよ。それに舞踏も御上手だつて……よくその方の事伺ふといゝ。

（花子）　まア、舞踏？　ほんとに面白いのねエ。
（宇佐子）　花子さんも舞踏お好き？　何所でお習ひ遊ばして？
（花子）　學校で！
（宇佐子）　アラ、學校なア矯正術ですワ。舞踏と云ふ程のものぢやア無いのよ。舞踏と名の付くからは、ちやんと音樂も樂隊がやつて、男と女が同數に寄つて、眞個の型でやらなけりやア面白くないワ。尤もこりやア、ちやんと練習所で習はつて、それから何遍も舞踏會へ出て、段々場數を踏んで來なけりやア、とても上手に成れませんけども……。
（花子）　それぢやアあの……よく西洋の畫にある樣に！
（宇佐子）　さうですとも……それであゝ云ふ會へ出ると、第一交際が廣くなけりやアいけず、又交際が廣けりやア廣いだけ、何うしても躍る數が多くなるから、同じ所を廻つてる

樣でも、一晩に十里や二十里歩行く理になります。
（花子）　まアそんなに？
（宇佐子）　それが貴女一晩と云つても、九時頃から三時頃までゝすもの……盛んな時にやア夜が明けてから歸る位ですワ。ですから平生體を馴らして、ようく運動で鍛へて置かなけりやア、迚も續くもんぢやありません。其所へ行つちやア私なんざア、毎日運動してますから、どんな事があつても平氣なもんです。
（花子）　私も體操は好きでしたワ。
（宇佐子）　體操ですッて？　體操計りが運動ぢやアありませんよ。テニス、クリッケット、フートボール、ベースボール、ジャンプ、レース、スケーチング。
（花子）　それみんな遊ばすの？
（宇佐子）　まだありますワ。日本のなら柔道、擊

剣、薙刀、鎖鎌……。

（花子）　アラまアそんなものまで……。

（宇佐子）それから馬も乘りましたが、此頃また自轉車を始めたの。……自轉車はほんとに面白い事よ。貴女もお乘りでせう？

（花子）　私まだ……。

（宇佐子）アラ、お乘んなさらないッて？　まア厭な！　それぢやア此頃の御交際は出來ない事よ。自轉車は重寶で、何所へでも乘つてけますから、自然見聞が廣くなつて、人中へ出ても話に困らない事よ。……見聞が廣くなると云へば、旅をするのが一番ねエ。貴女も旅はお好でせう。

（花子）　はア面白いのねエ。

（宇佐子）何所まで入らしつて？

（花子）　大磯、箱根……去年熱海へ參る筈でしたが、銚子へ行つてしまつたもんですから。

（宇佐子）それから何方？

（花子）（少し極り惡さうに）まだ他は存じません。

（宇佐子）それぢやア旅をしたつて云ふ程ぢやア無いワ。そんな大磯や箱根なんぞなら、子供だつて行くぢやありませんか。私なんざア、まア第一に、富士へ登つた事が三度、日光が六遍、伊勢が七回……東海道は何度通つたか知れませんが、中仙道は二度、山陽山陰が四度、四國が五度に、九州が一度、……北海道は去年行きましたが、今年は蝦夷まで行かうかと思つて……まア海だけは仕方がありませんが、後はみんな自轉車で行きます。……貴女御一所に入らつしやいな！

花子呆れて默つてしまふ。

（宇佐子）尤も自轉車が乘れなけりやア、馬で入らしつてもいゝでせう。アラ馬も乘れないの？　それぢやア仕方がありませんから、今からお初めなさいよ。まア、馬は生物だ

から面倒ですけども、自轉車なら譯ありません。私なんざァ乘り出してから、日に二十哩宛は屹度乘ります。ねエ貴女もお初めなさいな！」丁度彼所にありますから、行つて敎へてあげませう。さア、花子さん！

ト、はや中腰に成つて促がす。花子迷惑さうに、

（花子）　また此次願ひませう。

（宇佐子）　そんな因循な事云つてるから、何時まで經つても乘れはいんですワ。

（花子）　でもあの……今日はお客樣が御座いますから。

（宇佐子）　アヽさうでしたねニ。それぢやァ今度に致しませう。けどもまだ何誰もお見えにならない樣ねエ。……あゝ自轉車の御話をしたら、又乘り度く成つて來た。私まだ今日は十哩しか乘らないから、一寸行つて、もう少し乘つて來る事よ。……御家は御庭

が廣いから、彼所だけでも御稽古が出來るのに、あゝ因循な花子さんだねエ。……ドレ、それぢやァ暫時御免遊ばせ！

ト、云ひ〳〵飛立つ樣に出で行く。松子見送つて、

（松子）　ほんとに活潑な方ぢやァないか。

ト、花子を見かへる。花子舌打して、

（花子）　チョッ、何てエ御轉婆だらう！

第八節

松子夫人　お清　志保子

（お清）（次の間から出）　あの……志保子樣が入らつしやいまして御座います。

（松子）　オヽ、世野江さんのお嬢さんかエ？よく入らつしやれたねエ。直ぐに此方へ！

（お清）　畏まりました。（ト入る）

（花子）（まだ進まぬ顏で）　また何誰が入らしつたの？

（松子）　世野江さんの、志保子さんと云ふ方だよ。

（花子）何様な方？

（松子）あの方はお前……とてもお前なんぞとお話が合やしないよ。

（花子）學者なの？

（松子）いゝえ？

（花子）美術家なの？

（松子）さうでも無い。

（花子）ぢやアまたお轉婆なの？

（松子）どうして大差異だよ。

（花子）まア、そんなら何様なんだらう。（ト好奇に振り向いて往ち樣へろ）

此所へ志保子は、質素な扮裝、白キャリコの前垂掛、風呂敷包を持ち、徐に入つて來て、しとやかに辭儀をする。

（志保子）小母さん、ほんとに遲くなりまして濟みません。今日は何うも難有う！……こんな平常の風俗のまゝで……（ト、氣にして前垂を外づす事あり）

（松子）なアに貴女、却つてその儘の方か宜し

いんです。ちつとも氣の詰まる方は入らつしやらないんですから……コレ花子や御挨拶をなさい！　志保子さん、これがあの娘です。何卒御心安く！

（志保子）初めて御目に掛ります。お噂は御母樣から伺つて居りまして、是非お目に掛り度いと存じて居りました。（ト、愛想よく云ふ）

（花子）何卒よろしく。（ト、初々しく挨拶しながら、頻りに樣子を見る體あり）

（志保子）貴女に御目に掛るのでしたら、もう少し用意を致して參り度かつたんですが、丁度あの、今日は私の當番で……あゝ、一寸買物に參つたものですから……。

（松子）それぢやア志保子さん！　今日は貴女が仕込に入らしつたのですか？

（志保子）はア、まだ馴れないもんですから、好い物が買へないんですけども、何だか面白半分にねエ、いろんな店へ行つてやりまして、思はず學問を致しましたの、

（松子）　それは宜しう御座いました子。でも貴女方の時分から、さうして修行して居らつしやると、今に屹度好いお嫁さんに成れますねエ。

（志保子）　アラ、そんな事は存じませんけども、何だか面白いもんで御座いますから、自然と色々な事覺えまして、私ア嬉しくつてたまりませんワ。

（松子）　けども、そんなに滿足して居らつしやるのは、貴女ばかりでせう。

（志保子）　いゝえ！　何誰もみんな喜んで居らしつて、不平云ふ方なんぞ一人もおりや致しません。ほんとに好い學校で御座います。ト、樂しさうに諾す。花子聞き付けて、此時膝を進ませ、

（花子）　阿母さん！　それ何所の學校の事なの？

（松子）　此の方の居らつしやる……

（志保子）　家政學校の事で御座いますよ。

（花子）　アラ、家政學校！　（ト、少しく意外の體）

（志保子）　貴女入らしつた事御座いまして？

（花子）　いゝえ、そんな所……

（志保子）　そんなら是非參觀に入らつしやいましよ。面白う御座いますから……

（花子）　だつて……御料理計りしてるんでせう。

（志保子）　他に種々な事が御座いますワ。

（花子）　他につて、裁縫でせう。

（志保子）　裁縫計りぢやありません。

（花子）　そんならあの家政學……私も教はりましたワ。ほんとにあんな眠む度いもの……

（志保子）　ホ、、、眠む度けりやア、お寢みに成つても關ひませんが、私の學校のは、それは〳〵面白いんですよ。第一先生が、皆さん御熱心で居らつしやいますもの。

（花子）　だつて貴女！　他の學科は無いんでせう。まア文學だとか、圖畫だとか……音樂

や舞踏なんぞも。

（志保子）アラ、無い事が御座いますもんか。家政の事は午前中に濟ましまして、午後は音樂もあり、舞踏もあり、圖書もあり、文學諸禮もあり、講演會もありやァ、理學の科外講義もあり……ほんとに面白いんですよ。紀念日だとか、大祭日などには、活人畫をやつたり對話をやつたり……みんなが交る交る藝盡しをするんですが、それが何樣に面白いでせう。ァ、、ほんとに貴女、一度見に入つしやいましな！　御母樣も御一所にねェ！　私御案內致しますから。

ト、松子を見て目配する。

（松子）いゝえ貴女！　參觀どころぢやありません。此娘も何所へか入れなけりやなりませんから、貴女方と御一所に、家政學校へ上つたら何うだと申しますんですけども、何うしても厭だと申ますんで……。

ト、云ひかけると、花子は母の袂を引く。松子はわざと心付かぬ體で、

（松子）そりやァ貴女の樣な御氣分なら、屹度面白いに相違無いんですけども、花子は妙な性分で御座いますから、迚もさう云ふ御交際は出來ますまい。

ト、云ふ時、又花子は袂を引く。松子まだ見向きもせず、

（松子）何しろ宇佐子さんの樣な活潑な方や、羽根子さんの樣な學者の方や、貴美子さんの樣な美術家の方で無けりやァ、とても御交際は出來ませんから。

（花子）あら！

ト、遂に强く袂を引く。松子初めて氣付く體で振りむき、

（松子）何だねェ！

（花子）阿母さん、そんな事を云つちやァ厭だァ。

（松子）何をさア？

（花子）私……行く事よ！

（松子）何所へ？

（花子）上る事よ！

（松子）何所へさア？

（花子）私……家政學校へ上る事よ！

（松子）家政學校へ？　だつてお前厭だと云つたぢやないか。

（花子）いゝえ、もう好くなつたの。

（松子）まア何うして……。

（花子）今志保子さんのお話で、何だか急に好きに成つたワ。それに志保子さんほんとに好い方だから、私此方と御交際したいワ。

（松子）ぢやア宇佐子さんとは？

（花子）あんなお轉婆、大嫌ひ！

（松子）ぢやア、羽根子さんとは？

（花子）あんな生意氣、大嫌ひ！

（松子）そんなら貴美子さんとは？

（花子）貴美子さんぢやない、キザ子さんだワ。私大嫌ひ、大嫌ひ！

（松子）さう。そんならその志保子さんの樣に、これから家政學校へ入つて、女の道を勉強お爲だチ。

（花子）はア！

（松子）屹度だチ？

（花子）屹度！

此以前より、お清はそつと縁側へ出て來て、障紙の蔭で立聞する事あり。此時我知らず躍り出て、

（お清）奥樣！　おめで度う御座います。お嬢樣萬歲！

ト、叫ぶ。花子は不意に驚く體。松子はそれを制して、

（松子）コレ、まだ早いぢやないか！　それよりはやく皆さんを御呼び申して！

（お清）ハイ、畏りました。

ト、お清はまた急いで出て行く。

第九節

松子夫人　花子　志保子

（花子）（腑に落ぬ體で）阿母さん！　何うしたの？

（松子）何うもしやしないんだよ。

（花子）だつて清が萬歳だつて……。

（松子）それはお前が、平常あんなに厭がつて居たのに、……急に心が改まつて、家政學校へ上る氣に成つたから、それでおめで度うと云つたんだらう。家政學校へ上りさいすりやア、もうお肴を焦がしたり、指を火傷する事も無いから、お前も安心するが可いぢやないか。

（花子）……（苦笑して指の繃帶をなぶつて居る。）

（志保子）それでは花子さん！　ほんとに私の學校へ入らしつて？

（花子）ほんとに上りますから、何卒宜しく！

（志保子）まア嬉しい事！　それぢやア私のお友

達を、これから貴女に御紹介申しませう。小母さん！　もう宜しう御座いますか？

（松子）何卒！

ト、點頭き、やがてまた席を設ける。花子はまだ合點ゆかず、モヂ〳〵二人の顏を見較べて居る。

第十節

同上　宇佐子、羽根子、貴美子（三人相次で出て來る）お清

志保子は立つて襖を明け、

（志保子）宇佐子さん、入らつしやいましな！

（宇佐子）はい！

ト、以前の宇佐子、今度はしとやかに出て來る。

（志保子）私のお友達、家政學校の飛井宇佐子さん！

（宇佐子）先刻は失禮致しました。（ト、挨拶して座に着く）

（花子）……（ト呆氣に取られて辭儀する）

（志保子）羽根子さん、入らしつて下ださい！

（羽根子）はア！

ト、これも以前に似ず、徐に座に直る、

（志保子）私の同級の方で、真鍋羽根子さん！

（羽根子）先刻は失禮致しました。

（花子）……（無言で辭儀する）

（志保子）貴美子さんも何卒お早く！

（貴美子）はい、只今！

ト、貴美子今度は畫具箱も持たず、しとやかに出て座に着く。

（志保子）同室の色澤貴美子さん！

（貴美子）先刻は失禮致しました。

（花子）……まア……皆さんお友達なの？

ト、一同の顏を見廻はす。松子漸く膝を進ませ、

（松子）皆さん家政學校に居らつしやる方さ、お前驚いたかエ？

（花子）まア、私……ちつとも……

ト、極りの惡い體。志保子はそれを慰める樣に、

（志保子）是から貴女が御出でになれば、みんなお友達に成るんですの。けども花子さん！決して御心配には及びませんよ。貴美子さんだつて、先刻の樣にキザでは無し、羽根子さんも生意氣ぢやア無し、宇佐子さんだつて、もうお轉婆ぢアありません。皆（少し力を込めて）家政學校の生徒ですから、何卒その御心算で御交際下ださい！

（花子）アラまア……それぢやアみんな故意と爲て居らしつたの？

（貴、羽、宇）はア！

（松子）けれどもこの志保子さん許りは、少しも故意では無いんだよ。――何を隱さう、――私はお前の心を直して、何卒して家政學校へ上がる樣にと思つて、種々心配した揚句、漸くこんな狂言を書いて、此のお嬢

さん方に譯を話して、役者に成つて戴いたのさ。所が皆さんも、よく私の心を察して、熱心に勤めて下だすつたから、思ひの外効驗があつて、お前の心がすつかり直つて、こんな嬉しい事は無いよ。――それとも花子！　お前は誑されて悔しいかエ？

（志保子）お腹が立つなら此通り、私達からも謝罪りますワ。ねエ皆さん！

ト、三人を見かへる。三人も點頭き合ひ、

（貴美子）花子さん、先刻は、

（羽根子）失禮な事許り申しまして、

（宇佐子）どうもまことに濟みません。

（貴美子）あれはもう水に流して、

（羽根子）これからはもう姉妹同樣、

（宇佐子）仲よくお友達に成りませうねエ！

ト、手をつき、口を揃へて云ふ。花子慌てゝそれを制し、

（花子）そんなに仰有つしやられては、私、何

と申してよいか解りませんワ。何卒そんな堅い事仰有らないで、ほんとに仲好くして下ださいましな！　阿母さん！　……私ほんとに嬉しい事よ。

（松子）オヽ、よく云つておくれだ！　それで私も安心した。皆さんも難有う御座います。それでは御仲間入の印に、私が御馳走致しませう。

ト、手を鳴らす。お清出て來る。

（お清）お召しになりましたか？

（松子）御用意が出來たかエ？

（お清）はい、もう宜しう御座ります。

（松子）お肴は焦げては居ないか。

（花子）アラ阿母さん！（と顔を掩ふ）

（お清）何う致しまして！　皆さんに手傳つて戴きましたから、みんなお見事に出來まして御座います。

（松子）まア、そんなことまでして下だすつた

の？

（貴美子）いゝえ、ほんの練習させて戴いた許り。

（松子）まア恐れ入りましたねェ。では早く出しておくれ！

（お清）畏りました。

ト、これにてお清は、次の間から膳部を運ぶ事あり。

（花子）私お手傳してあげやう。（ト、これを助ける）

（お清）アレ、恐れ入りますこと！

（花子）私もう生れ變つたんだから、何樣なお手傳でもしてあげるよ。

（お清）まア、ほんとによく生れ變つて下ださいましたねェ。

（花子）で、もう明日から家政學校へ上るの？そして種々な事敎はるの？

（お清）まア、結構で御座いますねェ。

（花子）お料理でも裁縫でも、今度は私が清に敎へてあげるよ。

（お清）何卒お願申します。

ト、この臺辭の間に、膳部皆運び了る。他の者はそれを聞いて、皆々笑ひ興ずる事あり。よき程に松子、

（松子）さ、皆さん何卒お始め下たさいな！花子も御免蒙つて御招伴をし！

（お清）お嬢さま何方に致しませう。

（花子）私、志保子さんのお隣が好いワ。

（お清）では此方へ！

ト、花子、志保子の側に座につく、

（志保子）何うも恐入りますのねェ。私はお手傳ひも致さないで、御馳走許り戴いて……

（松子）何も無いので御座りますよ。……せめて餘興でも出來るとよいのですが……

（花子）アラ阿母さん！

（松子）何を？

（花子）餘興は先に濟んだぢやありませんか。

（松子）ほんに然うだつたねェ。ホ、、、。

（一同）ホヽヽヽ！

皆々打興ずる。よろしく幕

笑ひ山 終

明治四十一年二月十日印刷
明治四十一年二月十三日發行

定價 四拾錢

不許複製

著者 巖谷季雄
東京市麴町區內幸町一丁目五番地
發行者 光村合資會社出版部
右代表者 黑田直道
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者 山田英二
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所 博文館印刷所

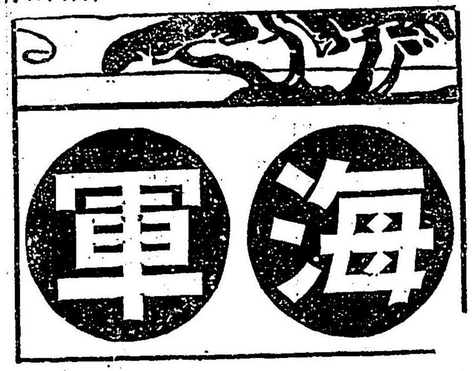
發行所 東京市麴町區內幸町一丁目五番地 光村合資會社出版部

★日本隨一の美麗なる雜誌★

★日本唯一の海軍雜誌★

東宮殿下賜御覽

（月刊）寫眞雜誌（毎月一回一日發行）



一部定價 拾五錢

郵税壹錢◎部前九錢◎十部壹錢◎七部四錢
共六錢◎拾金二拾圓同

發行所 東京市麹町區内幸町一丁目五番地 光村合資會社 出版部

樂しく日を送らんとする者は笑を讀め！福祿を希ふものは笑を讀め！

▲讀物▼◎滑稽小說◎時事狂言◎名士逸話奇談◎時事諷言◎滑稽輕口◎名家閑談◎家庭笑話◎川柳、狂歌◎一口噺◎都々一◎替歌◎落語

上品なる滑稽文藝雜誌

毎月二回發行

五日二十日

▲繪畫▼◎彩色漫畫 二葉 ◎二色版名勝寫眞 一葉
◎演劇光景寫眞 一葉 ◎美人寫眞 二葉

其他廿餘の木版漫畫何れも一見抱腹の珍材

長壽を欲する者は笑を讀め！病を治癒せんと欲するものは笑を讀め！

【一部拾貳錢郵税壹錢◎半年分郵税增刊共壹圓六拾錢◎一ヶ年同參圓參拾錢】

發行所 光村合資會社出版部

近刊豫告

笑文庫第貳編

太平樂

武田櫻桃先生著

表紙石版三度刷横綴紙數約二百頁頗美麗岡野榮氏華木版十數個入

△アハ、と笑ひ、オホ、と微笑み給ふて、無邪氣なる滑稽に三斗の溜飲を下げんと思ひ給ふ方は、來りて我が太平樂を讀み給はんことを

△樂天宗の本山に詣でゝ隨喜の嬉涙を流さんと望まるゝ有緣の衆生は來りて、此の大平樂に結緣し給はんことを

△枝を鳴らさぬ御代の大平に、鼓腹して樂しまんとする讀者は、何はさて置き先づ本編を手にし給ふて頑を解き給へやと、謹んで白す

發行所◎麹町區內幸町一丁目五番地
光村合資會社出版部

近刊豫告

皇太子殿下

韓國御渡航記念寫眞帖

長くも我東宮殿下が海を渡たらせられ親しく韓國を訪はせ玉ひしは、是れ實に未曾有の御壯遊にして、舉國臣民の相共に感嘆して措かざる所也。本社殊遇を蒙り供奉經に社員を陪乘せしむるの榮を得て、此盛儀を鏡面に收めたるもの甚だ多し、即ち此國民的記念物は獨り本社の私するものにあらざれば茲に其粹を拔きて寫眞帖を製り、廣く世に頒つ事としたる者也。

寫眞廿四枚挿入
用紙アートペーパー
表紙石版摺
(上)一部壹圓
(下)一部壹圓

海軍中將出羽重遠閣下題辭
海軍々醫中監横井太郎先生著

日露海戰

快彈餘響

定價參拾錢
郵稅六錢

口繪寫眞 海軍省御藏版日本海大海戰第二圖◎破壞せられたるアリョール上甲板◎砲後

賣出景品 海軍記念日(スタンプ附)繪葉書(三枚一組)を添附す

發行所 東京市麹町區內幸町一丁目五番地
光村合資會社出版部

258
4
800

工業經濟專攻者 窪田重弍先生著

工業實地經營論

菊判總クロース定價壹圓貳拾五錢
金文字入美裝製本既成發賣

工業を實際に營まんとするもの若くは工業經營に關係を結ばんとするものゝ最も渴望し最も要望しつゝある物は、一に工業の實地經營に對し指針となり案内者となるべき書籍の絶無なりし事也。事實、工業に關する書籍の刊行敢へて少なからずと雖も、多くは理論に傾き、實驗に依り周密に親切に其の經營策を講じたるものは未だ曾つて有らず、今即ち此の書あり。著者は工業經濟を專攻して、曾つて英獨兩國に留學し、歸來大工業の實地經營に親接して令名あり。此書は工業の實地經營に對し、先生が蘊蓄せる其學識と、實地より得たる其經驗とを傾盡して、工業の海に船を浮べんとするものが水先案内者たるを期せられたるもの也。

東京市麹町區内幸町一丁目五番地
發兌元　光村合資會社出版部

世界相對論

笑ひ山

特13
813

091903-000-7

特13-813

笑ひ山

巌谷　小波／著

M41

DBO-0440